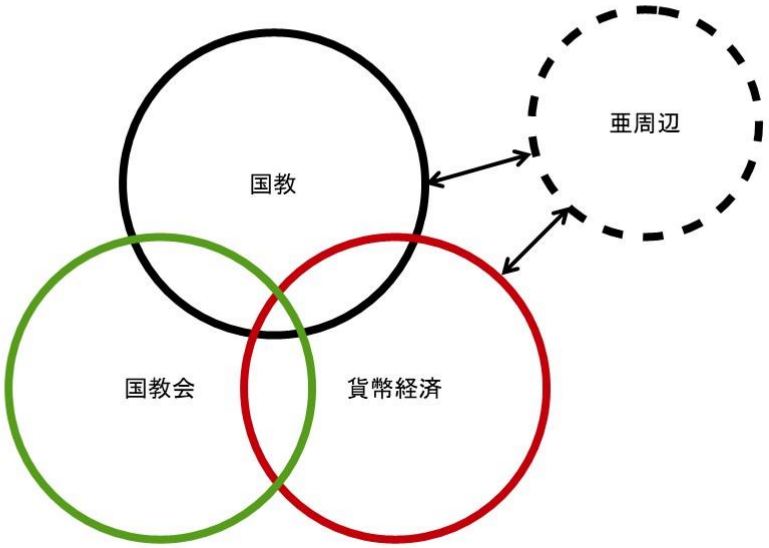
5. 「広義の中世」の成熟期前半、および「広義の近代」の出現期前半（12世紀後半～14世紀後半）

5．1 「広義の中世」と「広義の近代」のはじまり

貨幣経済が誕生した場面から「広義の中世」がはじまる。そして、商品経済が誕生した場面から「広義の近代」がはじまる。本書では、これまで貨幣経済と文治体制について述べ、さらに商品経済と法治体制を論じた。本節でそれらに再度言及し、「広義の中世」の認識を整理した後、「広義の近代」とのちがい、および重畳をあきらかにする。

下図（図10）は中世帝国の統治形態の抽象で、「広義の中世」の出現期の抽象でもある。

図10　中世帝国の統治形態



執政を軍政と民政に分割し、政体を中央集権化した「帝国」が中世帝国である。民政の中央集権化が官位差をつくり、官位差が部族差を解消する。そして皇帝や「諸王の王」が軍政と民政を束ねるが、血統や人格だけで軍政と民政を束ねることはできない。皇帝や「諸王の王」は金貨や銀貨を鋳造して発行し、軍政と民政を束ねた。すなわち、金貨や銀貨は皇帝や「諸王の王」が文官や武官、地方の有力者等に与える財である。

他方、中世帝国は国教を制定する。国教が最高法規になり、他の信仰を糾合して慣習法を束ねる。そして、国教会が統治機構になる。国教会は金融も営んだ。キリスト教会や仏教寺院への寄進は事実上の預金である。

（サーサーン朝ペルシャでは神官が裁判官を兼任した。ビザンツ帝国も同様である。それどころか、学校の教師を兼任したりする。筆者は、ユリアヌスがキリスト教会に反発したもっとも大きな理由はキリスト教会による学校支配であると考えるが、ビザンツ帝国がキリスト教会の「弊害」を取り除くのはバシリカ法制定後である）

バシリカ法以前のビザンツ帝国の統治体制は文治体制で、キリスト教会が恣意的にユスティニアヌス法を修正して裁判の判決等を下していた。すなわち、キリスト教会は準立法府でもあった。マケドニア朝がバシリカ法を制定した目的はユスティニアヌス法を公用語に書き直すことであったが、それが、皇帝が「立法者」として君臨する場面をつくり、立法府の設立と国法の制定につながる。そして国法の下で執政を担う行政府の設立にもつながる。

財貨が、土地だけでなく人間も売買可能な財＝財産にする。そして財貨の大保有者（貴族や聖職者）たちが巨人化し、支配者階級を形成する。「広義の中世」の出現期に、貴族階級や聖職者階級が保有する荘園が増大し、古代帝国からの継承（公有地や共有地、および自由農民）が縮小した。

他方、財貨と財貨（金貨と銀貨）、財貨と物品貨幣（家畜や穀物）のクラス間交換が具現し、経済空間に順序構造＝貨幣経済を形成する。その後荘園が巨大化した場面で中世帝国は財政難に陥るが、貨幣経済の拡大が中世帝

国の文治体制を維持する。すなわち、「広義の中世」の出現期（4世紀後半～8世紀後半）に国教と国教会、貨幣経済が三位一体化し、版図内の民衆を支配した。

中世帝国の他に「広義の中世」の支配的要素がひとつある。亜周辺である。「広義の中世」の出現期は、中世帝国の版図外に他の中世帝国と亜周辺が外在する時代である。他の中世帝国も独自の国教と国教会を有し、独自の財貨を発行した。異なる国教と異なる財貨の下で、異なる中世帝国が対立し、戦火が勃発する場面があった。他方、統治体制と貨幣経済の対称性が外交や平和条約の締結を可能にする。

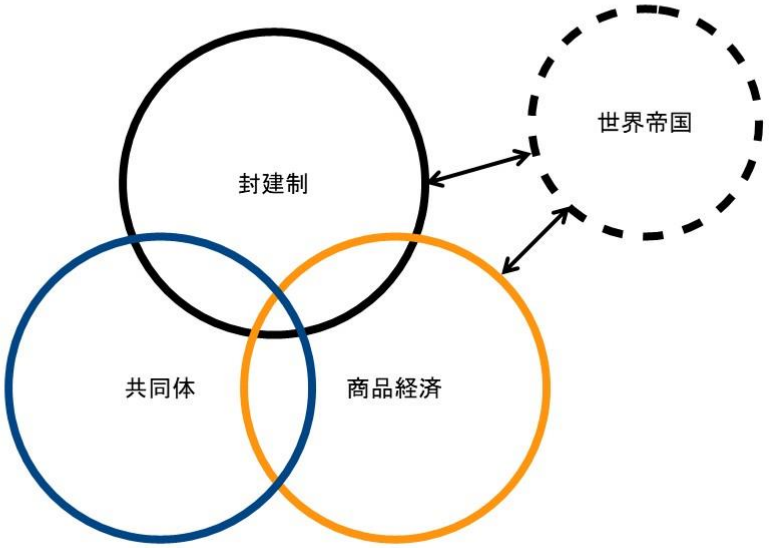
だが、亜周辺に最高法規に相当する国教はないし、財貨もない。亜周辺の民衆も信仰に帰依していたが、彼らの信仰は掟であり、他の信仰や慣習法を糾合する場面はない。また、亜周辺の族長が金貨や銀貨を発行しても、統治制度として機能する場面はなかった。

とはいえ、亜周辺からも中世帝国の国教と国教会は見えるし、財貨も見える。亜周辺は、中世帝国の富財をしばしば略奪するが、亜周辺の統治形態と中世帝国の統治形態は非対称である。したがって、中世帝国と亜周辺の外交や条約締結は容易でない。多くの場合、中世帝国と亜周辺の関係は軍事的対立になり、戦火が恒常化した。中世帝国の支配者層は、亜周辺に国教と国教会を押し付け、軍事的対立を解消しようとした。

（亜周辺に国教＝最高法規は存在しない。亜周辺の支配者層にとって、財貨は制度＝統治制度ではない。財貨はたんなる道具である。困ったことに、亜周辺の支配者層が交代しても中世帝国の政策に変化は生じない。中世帝国が亜周辺に国教と国教会の押し付け、暴力が伴う場合があった。おそらくそれが、中世帝国と亜周辺の戦火が恒常化した原因である）

下図（図11）は封建国家の統治形態の抽象で、「広義の中世」の突破期の抽象である（本書では、いわゆる家産国家も含めて「封建国家」と呼ぶ）。

図11　封建国家の統治形態



はじまりはアッバース朝イスラーム帝国が制定した金銀複本位制である。金銀複本位制の下で銀貨が秤量貨幣化し、すべての銀貨が等価になる。そして、財貨の政治的機能（統治制度としての機能）が低下し、やがて銀貨＝銀が世界通貨になる。他方、身分制と恩貸地制が誕生し、さらに身分制と恩貸地制が複合して新たな統治制度＝封建制が誕生する。

10世紀のマケドニア朝ビザンツ帝国がバシリカ法を制定してユスティニアヌス法を卑俗法化し、11世紀の北宋が「新法」を制定した。それにより国教会の政治および経済的役割が低下する。マケドニア朝ビザンツ帝国も北宋も計画経済を推進し、その後12世紀のコムネノス朝ビザンツ帝国と南宋が身分制と恩貸地制を具現する。

（とはいえ、最初に身分制を制定した中世帝国は遼＝契丹である。遼＝契丹の身分制は単純である。遊牧民と農耕民の居住地域を区分け、慣習法の区別を厳格化したにすぎない。だが、それが「身分」になる。遼＝契丹では、農民が兵士になる場面はなかったし、不可能なことでもあった。江戸時代の日本の身分制も単純である。すなわち士農工商である。江戸時代の被差別民は身分＝職業身分のない人々であったが、支配されない人々でもあった）

恩貸地制は、諸侯や農民が開墾した山林等の所有を皇帝や国王が保証する制度である。開墾地に農民が移動し、荘園が労働力を喪失して衰退した。そして、コムネノス朝ビザンツ帝国や南宋から封建制を輸入した亜周辺で、身分制と恩貸地制が複合し、封建社会が誕生する。さらに村落共同体＝農村が誕生し、中世都市＝商工業都市も誕生する。

（封建制下で、村落共同体＝農村と中世都市＝商工業都市が共存共栄する共和的社会が封建社会である。ちなみに、封建社会の贈与と返礼の関係を狩猟採集社会の供託関係や氏族社会の互酬関係と同様に考える文化人類学者や社会学者等がいるが、まちがっている。封建社会は計画経済の下で贈与を行う。そして返礼を強要する。封建社会の贈与と返礼の関係は、貨幣経済の下で富＝消える自然循環物と財＝消えない非自然循環物がひとつのクラスを形成して「富財」になった後の関係である。しかし、狩猟採集社会の供託関係や氏族社会の互酬関係は、富と財が分離していた時代の関係である。肉や魚は腹いっぱい食べても余る。余った肉や魚は腐らせるより他人に食べてもらうほうがよい。同じことが、採取した果実や木の実についてもいえる。すなわち、狩猟採集社会の互酬関係は、互いに余り物を譲渡する関係である。おぼろげではあるが、そのような交換関係は今も残っている）

以上が、「広義の中世」の突破期（8世紀後半～12世紀後半）の概要であるが、封建社会の進展に並行して秤量貨幣化した銀貨が世界通貨になり、世界通貨＝銀の下で経済空間に位相構造＝商品経済が生じる。そして物品貨幣がゼロ次クラス商品になり、一次クラス商品や二次クラス商品が誕生する。また、金融商品（手形や債券等）も誕生して信用取引が増大する。

12世紀後半、ユーラシア大陸の東西で「広義の近代」がほぼ同時にはじまる。ビザンツ帝国も南宋も13世紀に滅ぶが、ビザンツ帝国や南宋から封建制を輸入した亜周辺が封建国家に変貌し、商品経済を拡大する。他方、封建国家の外部に「世界帝国」が誕生する。

図11の封建国家は、図10の亜周辺である。「広義の近代」の出現期に、商品経済の下でユーラシア大陸地図の「地」と「図」が反転した。とはいえ、それが露呈するのは「広義の近代」の突破期（16世紀後半～20世紀後半）である（コラム55）。

コラム55：「地」と「図」の反転

歴史家の故岡田英弘氏は、世界帝国＝モンゴル帝国が誕生した場面から近代あるいは「広義の近代」がはじまった、と論じている。だが、岡田氏にユーラシア大陸地図の「地」と「図」が反転したとの認識がない。筆者の認識では、「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の重畳が「地」と「図」の反転を引き起こした。現代世界でも「広義の近代」の成熟期と「広義の現代」の出現期が重畳し、「地」と「図」の反転が生じている。

物理学者は、空間のある領域がある性質を有する場合、それを「場」と呼んでいる。そして、宇宙空間は多数存在し、重力場という「場」がそれら宇宙空間を超越する、と考えているように思う。しかし、数学者が「場」を考える場面はほとんどない。数学者にとって、空間はそれ自体が構造である。したがって「場」を考える必要がない。また数学者にとって、空間が多数存在するのは常識である。なぜなら、数学には「平面」という考えがあるからだ。平面下での数の交換関係が空間＝構造を形成する。

問題は、歴史家や社会科学者の考えである。彼らは、世界や社会を「平面」と考え、帝国や国家を「空間」、政府や自治体等を「場」と考えているように思う。歴史家や社会科学者にとって、「空間」や「場」が変化したり、生成したり消滅したりするのは当然で、「平面」が変化する場合さえある。「地」と「図」の反転は「平面」の変化を意味する。余談であるが、筆者は、歴史家や社会科学者の考え方に気づき、慣れるまで時間がかかった。

５．２　モンゴル帝国の誕生と金朝の滅亡

前章で述べたが、金の西方支配は西夏と接するオルドス地方で止まる。他方、カトワーンの戦い後、西遼を建国した耶律大石が東征軍を編成して河北の奪還を目指すが、行軍中に死去する。

カトワーンの戦いから察するに、耶律大石が編成した東征軍は大軍であった。耶律大石の死後、その大軍が帰還すれば、西遼は東征を再度実施したかもしれない。あるいは、西征してホラーサーン地方やイラン高原を征服したかもしれない。だが、西遼は一切の軍事行動を止める。

歴史家たちは、塔不煙（タプイェン。西遼の皇太后）が遠征を嫌い、西遼は軍事行動を止めた、と論じている。しかし、塔不煙は１１５０年に死去し、その後耶律大石の末子耶律夷列が即位して２０年以上在位している。耶律夷列が遠征を嫌ったとは考えにくい。おそらく、耶律夷列は大軍を編成できなかった。耶律大石とともに東征した兵員の大半が帰還しなかったためである。

遼＝契丹滅亡後、モンゴル高原が空白地帯化した。当初、モンゴル高原で暮らしていた契丹人は金の侵攻を恐れたはずである。彼らは耶律大石とともにトランスオクシアナ地方に移り、西遼を建国した。その後東征軍に従軍し、河北の奪還を目指す。

耶律大石の死後、彼らはモンゴル高原に残った。彼らは河北の奪還を断念したわけではない。しかし再度の東征に必要な中心が不在であった。

１２０６年、モンゴル高原を流れるオノン川上流でテムジンが「チンギス・カン」に即位し、新たな中心が誕生する。

テムジンが契丹人であったか否かはわからない。契丹人であったとしても、出自は遼＝契丹の名門ではなかったと思う。とはいえ、チンギス・カン（おそらく「グル・カン」と同じ意味）に即位したテムジンは耶律大石が残した「東征」を引き継がねばならない。即位後、テムジン＝チンギス・カン率いるモンゴル軍が金に侵攻し、オルドス地方と河北を占領する。金の朝廷は中原に逃れ、開封に遷都した。

（当時の河北は江南＝南宋から技術を輸入し、農作物＝小麦等の生産量が著しく増大していた。したがって、河北を占領したモンゴル軍は食料に悩む場面がない。また、モンゴル軍はオルドス地方を奪還した場面で金の官営牧場を占領し、数万頭の良馬も獲得した）

モンゴル軍がオルドス地方と河北を奪還した頃、ホラズム・シャー朝の軍勢がトランスオクシアナ地方に侵攻し、アラーウッディーンと同盟を結んだクチュルクが西遼の帝位を簒奪していた（クチュルクはナイマン族出身のモンゴル人である。ナイマン族はテムジン＝チンギス・カン率いるモンゴル軍に滅ぼされている）。

１２１８年、モンゴル軍は西征してクチュルクを処刑する。そして西遼を版図に組み入れ、ホラズム・シャー朝と国境を接する。モンゴル軍の別動隊とホラズム軍の間に戦闘（カラ・クムの戦い）が勃発した。戦闘は引き分けであったが、テムジン＝チンギス・カンはクリルタイ（有力者会議）を開き、ホラズム・シャー朝との開戦を決定する。１２１９年、モンゴル軍の征西がはじまる。１２２０年、モンゴル軍はブラハを陥落し、サマルカンドも陥落した。アラーウッディーンは逃走し、長男ジャラールッディーンを後継者に指名した後、カスピ海西南岸のアバスクン島で死去する。

ホラズム・シャー朝を滅ぼしたモンゴル軍は、ホラーサーン地方に進軍し、メルヴ、ニーシャープール、ヘラート、ターカーン、バーミヤーン等の都市を破壊して殺戮を繰り返す。他方、ジャラールッディーンはガズナで挙兵し、パルワーンの戦いでモンゴル軍を撃破したが、インダス河畔の戦いで惨敗する（その後ジャラールッディーンは逃走し、西アジア各地に「英雄物語」を残して１２３１年に死去する）。

とはいえ、モンゴル帝国のホラーサーン地方支配は部分支配に止まる。征西から帰還したモンゴル軍は西夏に侵攻し、西夏を滅ぼす。そして岩塩産地を占領する。テムジン＝チンギス・カンは西夏が滅ぶ直前に死去するが、オルドス地方と河北を奪還した時点で遼＝契丹の版図を復元したといえる（コラム５６）。

テムジン＝チンギス・カンの死後、彼の三男オゴディが即位し、「大カン」を称する。オゴディ（在位１２２９～１２４１年）は凡庸であったが、河北で生産する大量の小麦、金朝の官営牧場を占領して獲得した数万頭の良馬、旧西夏で産出する多量の岩塩、そして旧西ウイグル王国（タリム盆地およびジュンガル盆地）で製造する鉄製武具や綿織物等があった。すなわち、大軍を編成して遠征し、兵站を維持する条件が整っていた。

即位後、オゴディは開封に遷都した金朝の討伐をはじめる。モンゴル軍は現在の山東省と山西省から開封を目指す部隊と、山西省から陝西省を迂回して関中から開封を目指す部隊に分かれて進軍する（他方、別働隊が豆満江流域を支配し、韓国＝高麗に侵攻する）。だが、前章で述べたように、淮北の地は荒廃している。山東省と山西省から開封を目指す部隊は「道なき道」を進み、進軍が大幅に遅れる。関中から開封を目指す部隊だけが金軍と戦った。

兵員数は金軍が圧倒していた。だが、淮北の荒廃は金軍にも及んでいた。河北を失った金朝は、農産物の確保に苦しみ、金軍の兵たちは十分な食料を得ていない。金軍の兵たちは飢餓状態でモンゴル軍に決戦を挑む。他方、モンゴル軍は塹壕を掘り持久戦で応じる。持久戦が功を奏し、金軍は瓦解した（三峰山の戦い）。

1234年、モンゴル軍が開封を陥落し、金朝が滅ぶ。オゴディは荒廃した淮北を放置し、河北を分割して縁者や各部族に分配した。そして、モンゴル高原に帝都カラコルムを建設し、南征と西征をはじめる。

（オゴディは、荒廃した淮北での放牧を検討したが、中止した。中国史の専門家たちは、淮北での放牧を検討したオゴディを非難するが、荒廃した農地は放牧で利用するほうが合理的である。現実に、15世紀の西ヨーロッパ諸国は荒廃した農地で放牧をはじめている。また、今の日本で「水田放牧」がはじまっている。そして、それが40万ヘクタール以上の休耕地を活用する手段のひとつになっている）

南征軍は関中から南下して進軍したが、名将孟珙率いる南宋軍が撃退する。他方、西征軍はカスピ海北方の「草原の道（カスピ海やアラル海、バルハシ湖の北方を通る道。概ね現在のシベリア鉄道沿線）」を通り、クリミア半島付近まで進軍する。途中、多数のキプチャク人やペルシャ人が殺害されるか西征軍の軍門に下る（後述するキョセ・ダグの戦いでルーム・セルジューク朝軍を圧倒したモンゴル軍＝探馬軍は西征軍の別動隊であるが、兵員の大多数がペルシャ人である）。

そして1238年、西征軍はシチ川の戦いでキエフ軍＝ウラジーミル・スーズダリ公国軍を破り、1241年のレグニツァの戦い（ワールシュタットの戦い）でドイツとポーランドの連合軍を破る。さらにモヒの戦いでハンガリー軍を破る。そして、広大なカルパチア盆地＝パンノニア地方の支配を目指すが、大カン・オゴディが死去する。オゴディの死報を得た西征軍総司令バトゥは、カスピ海北岸に注ぐヴォルガ川河口付近の都市イティルまで後退した。

バトゥは、パンノニア地方にいたのでは、政変が生じた場面でカラコルムに赴くことができないと判断したように思う。だが、バトゥがカラコルムに赴く場面はなかった。オゴディの死後、彼の長男グユクが即位するが、1248年に死去する（グユクの母親はオゴディの正室ではなかった。グユクの死は、おそらく暗殺である）。そして、チンギス・カンの末子トルイの長男モンケが大カンに即位する。

トルイは三峰山の戦いで金軍を破ったモンゴル軍の総司令で、バトゥの父親はチンギス・カンの長男ジョチである。しかも、モンケの母親とバトゥの母親は姉妹であった。バトゥにとって、モンケの即位は歓迎すべきことで、カラコルムに赴く必要がなくなる。

バトゥはイティルでジョチ・ウルスを開国した。モンゴル帝国が支配するユーラシア大陸西北部が、概ねキプチャク人が支配していた地域に止まる（ちなみに、イティルがジョチ・ウルスの首都サライになったとの説もあるが、サライはヴォルガ川中流域の都市である。イティルが存在した場所は今も不明である）。

コラム56：　西ウイグル王国の併合

テムジン＝チンギス・カン即位後、本文で述べたクチュルクの専横に煩っていた西ウイグル王国は自発的にモンゴル帝国に服従する。テムジン＝チンギス・カンは最恵国として西ウイグル王国を遇した。

ところで、西ウイグル王国にとって、テムジンは耶律大石＝グル・カンの再来であったかもしれないが、テムジンが称したのは「グル・カン」ではない。彼は「チンギス・カン」を号した。

オゴティの代に編纂されたといわれている「元朝秘史」によれば、テムジンの宿敵ジャムカが「グル・カン」を称したため、ジャムカを倒したテムジンはグル・カン＝大カンを超える「チンギス・カン」を号したことになっている。だが、この説明は怪しい。

そもそも、ジャムカは実在した人物なのか。また、チンギス・カンがグル・カンを超える「カン」であるなら、オゴティも「チンギス・カン」を号すればよい。だが、彼は「大カン」を号した。そして、オゴティの死後、グユクもモンケも、クビライも「大カン」を号する。筆者は、テムジンにグル・カンを号せない事情があったと考える。

テムジン＝チンギス・カンは遼＝契丹の再興を目指した。したがって、淮北の地は不要であり、開封に逃れた金朝を追走しなかった。他方、トランスオクシアナ地方の奪還と西夏侵攻は責務である。

だが、元史は遼＝契丹を重視していない。歴史家の杉山正明氏は疑問を感じておられるが、筆者も同感である。世界帝国化したモンゴル帝国（あるいは中華帝国化した元）に、遼＝契丹の継承国であるといえない理由があったのかもしれない。

５．３　十字軍国家の滅亡とパレオロゴス朝ビザンツ帝国の誕生

イスラーム教徒の英雄サラーフッディーンの死後、ローマ教皇インノケンティウス3世は第4回十字軍遠征を呼びかけた。そして1202年、第4回十字軍遠征がはじまる。

第4回十字軍に国王は従軍していない。軍勢の中心は若い貴族たちであったが、呼びかけ人のインノケンティウス3世には好ましいことであるように思えた。だが、彼らがレヴァント地方やエジプトに進軍してイスラーム教徒の軍勢と戦う場面はない。小アジアでルーム・セルジューク軍と戦う場面もなかった。彼らはビザンツ帝国に進軍する。進軍の口実は、「帝位を簒奪したビザンツ皇帝アレクシオス3世を廃位し、正統な帝位継承者であるアレクシオス4世を即位させる」というものであった。だが、目的はアレクシオス4世が約束した多額の報酬である。

（ハンガリーやヴェネツィアも金貨を鋳造して発行していたが、当時のヨーロッパでは、ローマ教皇とビザンツ皇帝が発行する金貨が「正貨」である。そして、第4回十字軍に従軍した若い貴族たちは、多額の借金を抱えていた。貸し手はヴェネツィア商人である）

1203年、第4回十字軍の支援を得てアレクシオス4世がビザンツ皇帝に即位する。だが、約束した報酬を支払わない。翌年、ドゥーカス・ムルツフロスがアレクシオス4世を殺害して即位するが、彼も報酬を支払わない。激昂した十字軍は、コンスタンティノープルを破壊して富財を略奪する。その後荒廃したコンスタンティノープルでフランドル伯ボードゥアン9世がラテン帝国を開国し、モンフェラート侯ボニファチオがテッサロニキ王国を開国する（コラム57）。

（ちなみに、ローマ教皇インノケンティウス3世は、第4回十字軍が遠征路の途中にあるダルマチア地方の湾岸都市ザーラ＝ザダルに住むキリスト教徒から富財を略奪した場面で、彼らを破門している。にもかかわらず、ラテン帝国の開国を承認した。私見であるが、インノケンティウス3世はギリシャ正教会を支配するつもりでいた。尚、ラテン帝国開国後、ヴェネツィアがザーラ＝ザダルを領有し、海路の中継地として活用する）

しかし1205年、二人の兄（ペタルとアセン）の後を継ぎ「ブルガリア皇帝」に即位したカロヤンがアドリアノープル近郊でラテン帝国軍を撃破し、ボードゥアン9世を捕縛して処刑する。そして1207年、テッサロニキ王国に侵攻し、ボニファチオが戦死する。だが、カロヤンはテッサロニキ包囲中に部下のマナスタルに殺害された（ちなみに、カロヤンは熱心なギリシャ正教徒であった。彼はビザンツ皇帝即位を目指していたかもしれない）。

他方、ビザンツ帝国の皇族や貴族たちが小アジアのビザンツ領でニカイア帝国とトレビゾンド帝国を開国し、バルカン半島でエピロス専制侯国を開国する。その後、偶然であったが、ニカイア帝国の兵士がコンスタンティノープルを奪還し、ニカイア帝国の副帝ミカエル・パレオロゴスがビザンツ皇帝ミカエル8世に即位する。だが、新生ビザンツ帝国＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国は大きな困難に直面した。以下、それについて述べる（コラム58）。

サラーフッディーンの死後、アイユーブ朝は彼の弟アーディル（アイユーブ朝第4代スルターン）の下で発展する。他方、1216年にインノケンティウス3世が死去し、ローマ教皇に就任したホノリウス3世が第5回十字軍遠征を呼びかける。十字軍の侵攻を知ったダマスカス王アル・ムアッザムは、エルサレムの城壁を破壊し、住民を避難させた。

第5回十字軍の中心はハンガリー王アンドラーシュ2世であったが、彼は遠征の途中でエルサレムの荒廃を知り、帰国する。だが、エルサレム王ジャン・ド・ブリエンヌとオーストリア公レオポルト6世、その他ドイツ諸侯が残る。1218年、彼らはジェノヴァ商船団の協力を得てエジプトに侵攻し、湾岸都市ダミエッタ（現在のディムヤート）を包囲する。アーディルは死去していたが、後を継いでスルターンに即位した彼の長男カミールがエルサレム返還を条件に和睦を提案する。ジャン・ド・ブリエンヌとレオポルト6世は提案を受け入れるが、ダミエッタ包囲後にローマから訪れた教皇特使ペラギウスが拒否する。ペラギウスは無謀な攻撃命令を繰り返し、十字軍は惨敗する。

ホノリウス3世は、ドイツ皇帝フリードリヒ2世にも第5回十字軍に合流するよう呼びかけていたが、フリードリヒ2世はシチリア復興に専念した。しかしホノリウス3世の死後、ローマ教皇に就任したグレゴリウス9世に遠征を強いられる。フリードリヒ2世は遠征の途につくが、疫病が流行ったため、一時帰国する。グレゴリウス9世は仮病と判断し、フリードリヒ2世を破門する。1229年、破門されたフリードリヒ2世下の第6回十字軍がパレスチナに進軍する。カミールは再度エルサレム返還を条件に和睦を提案し、フリードリヒ2世は提案を受け入れた。フリードリヒ2世はエルサレム王に即位する。グレゴリウス9世は、彼の破門を解くしかなかった。

（アル・ムアッザムが城壁を破壊した当時のエルサレムは人が安心して住める都市ではない。すなわち、奪還する価値がない。だから、第5回十字軍はエジプトに侵攻した、ともいえる。とはいえ、十字軍遠征の目的は聖地エルサレムの奪還である。そして、フリードリヒ2世がエルサレム王に即位しなければ、エルサレムを奪還したことにならない。フリードリヒ2世は、一滴の血も流すことなく、外交で目的を達成し、エルサレム王に即位した。ちなみに、後のオスマン

帝国がエルサレムの城壁を修復する）

　1231年、第6回十字軍遠征から帰還したフリードリヒ2世は「皇帝の書」を発布し、官僚機構を整備してイタリアで準法治体制を構築する。他方、ドイツ諸侯と「諸侯の利益のための協定」を結び、自治を認めた。以後、ドイツの統治形態が分権統治になるが、王権を強化しようとしていた彼の息子ドイツ王ハインリヒに不満が募る。1234年、ハインリヒはグレゴリウス9世の誘いと新ロンバルディア同盟の支援を得て反乱を起こす。フリードリヒ2世は反乱を鎮圧し、ハインリヒは自害した。
　しかし1239年、グレゴリウス9世はフリードリヒ2世を再度破門する。イタリア各地で皇帝派＝ギベリン派と教皇派＝ゲルフ派の闘争が勃発し、フリードリヒ2世が構築したイタリアの準法治体制が崩壊する。1250年、フリードリヒ2世（イタリア名フェデリーコ2世）が死去し、その後ホーエンシュタウフェン朝が断絶してドイツ帝国は大空位時代に突入する。
　多くの歴史家が、フリードリヒ2世は古代ローマの再現を目指していた、と論じている。「皇帝フリードリヒ2世の生涯（新潮社）」の著者である作家の塩野七生氏も、フリードリヒ2世を近代人として描きながらそのような認識を抱いておられるように見える。なるほど、フリードリヒ2世はイタリアを中心化してドイツや東ヨーロッパ諸国を周辺化しようとしていかもしれない。だが、12世紀後半から商品経済の時代がはじまっている。たとえ古代ローマの再現を目指していたとしても、聡明なフリードリヒ2世は商品経済（商品の生産と消費が連鎖する経済）のはじまりを認識していた。現実に、彼はドイツ諸侯と「諸侯の利益のための協定」を結ぶ場面で、リューベクの帝国都市化を認めている。
　フリードリヒ2世は、ギリシャ正教徒やイスラーム教徒との交易が可能な体制を構築するには、政教分離の必要があると考えていたように思う。皇帝派と教皇派の闘争は、政教分離派と政教一致派の争い、あるいは法治主義派と文治主義派の争いで、法の制定権＝立法権と法の執行権＝行政権を有する「立法者」の地位をめぐる争いであった（国法派と慣習法派の争いでもある。12世紀後半～14世紀後半に、世界各地で類似する争いが勃発している）。

　ところで、フィリップ2世の死後、イングランドから帰国した彼の嫡子ルイがフランス王ルイ8世に即位するが、3年後に死去する。その後彼の嫡子ルイ9世がフランス王に即位する。そしてフリードリヒ2世が死去する前年（1249年）、第7回十字軍を編成してエジプトに進軍する。だが、1250年のマンスーラの戦いで敗北し、捕らえられて捕虜になる。その後エジプトでクーデターが勃発し、王朝がアイユーブ朝からマムルーク朝に変遷する。マムルーク朝は多額の身代金を得てルイ9世を釈放した。1270年、ルイ9世は第8回十字軍を編成してアフリカのチュニジアに上陸し、再度エジプトを目指すが病死する。
　翌1271年、ルイ9世の弟アンジュー伯シャルル（シチリア王カルロ1世。1266年のベネヴェントの戦いでフリードリヒ2世の庶子マンフレーディを破り、シチリア王に即位した）とイングランド太子エドワード（後のイングランド王エドワード1世）が第9回十字軍を編成してアッコに向かうが撤退する。そして1289年にトリポリ伯国が滅び、1291年にアッコが陥落して「十字軍国家」は全滅する（コラム59）。

（一部の歴史家が、十字軍遠征は第3回十字軍遠征で事実上終わった、と論じている。だが、十字軍がレヴァント地方で建設した十字軍国家は13世紀末まで残った。すなわち、十字軍国家は約200年存続した。約200年間、イスラーム軍と戦闘状態にあった十字軍国家は多数の馬を必要としたが、周囲は「敵」で放牧ができない。馬は飼料を与えて飼育するしかない。そこで、ビザンツ帝国の農民がライ麦や大麦を栽培し、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人が十字軍国家に輸送する。ヨーロッパの国王やローマ教皇庁が彼らに財貨を支払ったが、筆者の認識では、飼料と家畜の不可逆な交換関係が最初の位相構造＝商品経済である。すなわち、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人と十字軍国家の交易が経済空間に商品経済が生じるテコになる。十字軍国家が消滅しても、商品経済は消滅しない。家畜の飼育とライ麦や大麦を栽培が拡大し、ユーラシア大陸西部で畜産農家が誕生する。他方、放牧が衰退した。同時代のユーラシア大陸東部も同様である）

　本節の最初で述べたが、1261年にミカエル・パレオロゴスがパレオロゴス朝ビザンツ帝国を開国し、ビザンツ皇帝ミカエル8世に即位する。他方、第9回十字軍遠征から帰国したシチリア王カルロ1世＝アンジュー伯シャルルが、ビザンツ帝国に侵攻して「ラテン帝国」の再興を目指す。だが、1274年の第2回リヨン公会議でギリシャ正教会がカトリック教会に譲歩し、東西キリスト教会の合同が実現する。東西キリスト教会の合同が、カルロ1世の機先を制した（ちなみに、神学者トマス・アクィナスがこの第2回リヨン公会議に赴く旅路で死去している）。
　しかし1281年、ローマ教皇に就任したマルティヌス4世が東西キリスト教会の合同を破棄する。そしてシチリア王カルロ1世がビザンツ帝国に再度侵攻し、「ラテン帝国」の再興を目指すが、翌1282年にシチリア晩祷事件（カルロ1世の強引な食料調達や家畜調達に反発したシチリアの民衆が蜂起した事件）が勃発し、進軍が頓挫する。
　ローマ教皇マルティヌス4世が、蜂起したシチリアの民衆を全員破門し、その後カルロ1世がビザンツ帝国への侵攻と「ラテン帝国」の再興を再々度目指す。だが、イベリア半島を出港してチュニジアを攻略していたアラゴン王ペドロ3世率いる140隻の大艦隊が、突如シチリア王国を襲撃する。

（アラゴン王国は、ハイメ1世（在位1213～1276年）の代にイベリア半島南西のバレアレス諸島を征服し、マヨルカ

王国を開国した。ハイメ1世の死後、長男ペドロがアラゴン王ペドロ3世（在位1276～1285年）に即位し、次男ハイメがマヨルカ王ジャウメ2世に即位する。ちなみに、バレアレス諸島最大の島はマヨルカ島で、面積は沖縄本島の約三倍である。音楽家のフレデリック・ショパンと女性作家のジョルジュ・サンドが滞在したことで有名であるが、現在のマヨルカ島は地中海の大リゾート地である）

アラゴン王ペドロ3世の妃コンスタンサは、前シチリア王マンフレーディの長女である。したがって、ペドロ3世が、自身と妃がシチリアを共同統治する、と考えてもおかしくない。シチリア晩祷事件で放棄した民衆もペドロ3世とコンスタンサの共同統治を望んでいた。

ローマ教皇マルティヌス4世は、ペドロ3世を破門してアラゴン王位を剥奪し、フランス王フィリップ3世（ルイ9世の次男。在位1270～1285年）の四男ヴァロワ伯シャルルに授ける。そのため、アンジュー家とバルセロナ家の争いは、歴史家たちが「シチリア晩祷戦争」と呼ぶフランスとアラゴンの大戦争になる。そして、カルロ1世とマルティヌス4世の野心、すなわち「ラテン帝国」の再興が頓挫する。

（ビザンツ皇帝ミカエル8世が莫大な金貨を送りペドロ3世を支援したため、マルティヌス4世はミカエル8世も破門するが、滑稽というしかない。ミカエル8世はカトリック教会の信徒ではない。彼はギリシャ正教徒で、ギリシャ正教会の首長でもある）。

1285年、マルティヌス4世が死去し、しばらくしてカルロ1世とフィリップ3世、ペドロ3世も死去する。しかし新ローマ教皇ホノリウス4世のバルセロナ家に対する姿勢が強固であったため、シチリア晩祷戦争は続く。1287年にホノリウス4世が死去し、新ローマ教皇に就任したニコラウス4世の下でようやく停戦協議がはじまる。

1291年にタラスコン条約が成立し、ローマ教皇ニコラウス4世はバルセロナ家の破門を解く。そしてバルセロナ家のアラゴン王位を認めた。他方、シチリア王位をカルロ1世の嫡子カルロ2世に授ける。だが、シチリアの民衆とペドロ3世の三男フェデリーコがカルロ2世の支配に抵抗する。フェデリーコは、カルロ2世下の軍勢だけでなく、兄のアラゴン王ハイメ2世下の軍勢とも戦った（彼らに「破門」は通じない。彼らはギリシャ正教やイスラーム教に改宗することもできるのだ）。1302年、カルタベッロッタの和約が成立し、約20年続いたシチリア晩祷戦争がようやく終結する。

結局、シチリア王国はアンジュー家が支配するナポリ王国（概ねイタリア半島南部）と、バルセロナ家が支配するトリナクリア王国（概ねシチリア島）に分裂する。分裂したシチリア王国＝シチリア両王国に東征する力はない。西方の安全を確保したパレオロゴス朝ビザンツ帝国は、1453年まで存続する。そしてギリシャ正教会＝東方正教会を維持し、後の「国民国家」の原型を形成する。

ちなみに、シチリア王カルロ2世の妃はハンガリー王イシュトヴァーン5世の娘マーリアである。カルロ2世とマーリアの間に子供が14人誕生している。タラスコン条約成立後、次女のビアンカがアラゴン王ハイメ2世の妃になり、カルタベッロッタの和約成立後、三女のエレオノーラがトリナクリア王フェデリーコの妃になる。また、早死にした長男マルッテロの息子ロベルトが後に初代アンジュー朝ハンガリー王カーロイ1世に即位する。

コラム57： キリスト教会の分裂

本文で述べたが、第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊して略奪した後、ローマ教皇インノケンティウス3世はラテン帝国の開国を承認した。そしてカトリック教会以外のキリスト教会をすべて異端視する。しかし、ごく少数を除き、ギリシャ正教会の司祭や司教たちが「教皇権」を認める場面はない。彼らは俗人＝ローマ教皇の金貨発行を容認しなかった。

金貨発行の他にも大きな問題があった。すでに述べたが、ビザンツ帝国はマケドニア朝期にバシリカ法を編纂して発布している。すなわち、バシリカ法は公用語＝ギリシャ語で書かれた最高法規で、ビザンツ帝国は立法府が諸法＝国法を制定して施行する準法治国家に変貌している。しかし、「教皇権」を認めれば、俗人＝ローマ教皇がバルカン半島や小アジア、エーゲ海沿岸や黒海沿岸で君臨し、ラテン語で書かれたユスティニアヌス法を施行する。それは文治体制への回帰でもある。近代の最高法規＝憲法に相当するものはなかったが、国法の下で裁判等を担っていたギリシャ正教会の司祭や司教たちは、法治国家を否定する「野蛮」を承認できない。

（ギリシャ正教会とカトリック教会の教義上のちがいはわずかで、統合の試みが続いていたが、第4回十字軍のコンスタンティノープル破壊と略奪は、キリスト教会の東西分裂（ギリシャ正教会とカトリック教会の分裂）を決定づけた。現在、キリスト教会は正教会＝オーソドックスとカトリック、プロテスタントに三分しているが、ちがいは教義上のちがいより教会組織のちがいのほうがおそらく大きい。同じことが仏教やイスラーム教についてもいえる）

コラム58： ルーム・セルジューク朝

歴史家たちは、コンスタンティノープル破壊後にヴェネツィアが得た「利（エーゲ海諸島の獲得や東地中海の制海権等）」を重視する。だが、ヴェネツィア以上に「利」を得た国家がひとつある。ルーム・セルジューク朝である。

ミュリオケファロンの戦い後、ルーム・セルジューク朝は隣接するダニシュメンド朝を滅ぼしアナトリア地方を統治した。だがフリードリヒ1世下のドイツ軍に首都イコニウムを一時占領され、その後内乱が勃発する。しかし1207年、スルターンに復位したカイホスロー1世（ミュリオケファロンの戦いで勝利したクルチ・アルスラーン2世の末子）が地中海沿岸の都市アンタルヤを占領してヴェネツィアとの交易をはじめる。

1210年、カイホスロー1世が死去し、彼の長男カイカーウス1世が弟のカイクバード1世を幽閉してスルターンに即位する。カイカーウス1世はトレビゾンド帝国を攻撃して黒海沿岸の都市シノプを獲得した。ルーム・セルジューク朝は、地中海沿岸と黒海沿岸の両面を得たが、その後カイカーウス1世はレヴァント地方に進軍して病死する。

カイカーウス1世の死後、幽閉されていたカイクバード1世がスルターンに即位する。カイクバード1世はカロノロスを占領して地中海沿岸の拠点を強化し、他方、黒海を横断してクリミア半島湾岸を征服する。すなわち、ルーム・セルジューク朝は地中海貿易に参入し、他方、黒海の海上を支配した。

ルーム・セルジューク朝は地中海沿岸と黒海沿岸の中継交易で多大な「利」を得たが、繁栄は長く続かなかった。1243年、カイホスロー2世（在位1237～1246年）下のルーム・セルジューク軍がモンゴル軍＝探馬（タマ）軍に惨敗する。その後ルーム・セルジューク朝はモンゴル帝国に服属する。

ちなみに、探馬軍とルーム・セルジューク軍の戦い（キョセ・ダグの戦い）は兵員数の差が勝敗を決めたといわれているが、探馬軍は遠征軍である。ふつう、兵員数で遠征軍が現地軍を圧倒する場面はない。まして主力部隊でない遠征軍が圧倒する場面はない。にもかかわらず、探馬軍が圧倒していたとすれば、ルーム・セルジューク軍の武具が貧弱で、数も少なかったのかもしれない。すでに述べたが、当時のユーラシア大陸東部と西部の決定的なちがい（圧倒的な非対称性）は鉄の生産量である。

コラム59： モンゴル軍の敗北

第7回十字軍が敗北した後、バグダードを占領しカリフを殺害したフレグ率いるモンゴル軍がレヴァント地方に侵攻し、アレッポを陥落した（フレグの西征は後述する）。だが、第4代大カン・モンケが南宋遠征中に死去したため、フレグは軍の一部を部下のキト・ブカに預けて転進する。その後、キト・ブカはダマスカスを陥落し、マムルーク朝に降伏を勧告する（アッバース朝が滅亡したとき、カリフの叔父がダマスカスに逃れている。キト・ブカはそれを知り、ダマスカスを占領したのかもしれない）。

だが、マムルーク朝の軍司令はバイバルスであった。彼はモンゴル軍に殺戮されたキプチャク人部族の出身である。幼い頃に奴隷にされ、アイユーブ朝の軍司令に売られた後、多数の戦闘で軍功を上げ、マムルーク軍の中心的存在になっていた。そして、モンゴル軍の強さは兵士の強さではなく、武具の性能の良さであることを熟知していた（したがって、正面と背後を同時攻撃すれば倒せる）。ダマスカス陥落後、キト・ブカ下のモンゴル軍とバイバルス下のマムルーク軍がパレスチナのガリラヤで激突した。当時のエジプトでも大型馬を飼育していたように思う。バイバルスは大型馬の脚力を活かしてモンゴル軍を誘導し、包囲して殲滅する。

歴史家たちは、マムルーク軍がモンゴル軍を殲滅した戦いを「アイン・ジャールートの戦い」と呼んでいる。そして、とりわけ西ヨーロッパの歴史家たちが、キト・ブカがキリスト教徒であったというのに、パレスチナ沿岸都市アッコの住民＝カトリック教徒たちが無抵抗のままマムルーク軍をガリラヤまで行かせたため、エルサレムを奪還する千載一遇のチャンスを逃したと非難する場合がある（ちなみに、1240年にアイユーブ朝スルターンに即位したサーリフが、フリードリヒ2世が外交で奪還したエルサレムを1244年に奪取している）。

だが、キト・ブカはネストリウス派キリスト教徒である。他方、第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した後、ローマ教皇庁は他のキリスト教会を異端視している。アッコの住民にとって、ネストリウス派キリスト教徒のキト・ブカは異端であり、モンゴル軍の一翼を担ったキリキア・アルメニア王国のキリスト教徒たちも異端である。彼らにとって、アイン・ジャールートの戦いは、異端と異教の戦いであり、モンゴル軍に肩入れすることなどできない。

しかもエルサレムは城壁を失っており、奪還しても人が安心して住める都市ではない（だから、第5回十字軍と第7回十字軍はエジプトに進軍した）。西ヨーロッパの歴史家たちが非難しなければならないのは、アッコの住民ではなく、他のキリスト教会を異端視したローマ教皇庁のほうである。

５．４ ドイツ騎士修道会とモスクワ公国の開国

ローマ教皇グレゴリウス９世がドイツ皇帝フリードリヒ２世を破門した１２２９年、多数の異教徒（リーヴ人やエストニア人）を殺戮し、リヴォニアとエストニア全土を支配したアルベルトが死去する。アルベルトの死後、刀剣騎士修道会と増援十字軍がリトアニアに侵攻したが、当時のリトアニアはミンダウカスが各部族を統合し、強固な軍事体制を築いていた。刀剣騎士修道会と増援十字軍はザウレ（シャウレイ）の戦いでリトアニア軍に惨敗する。その後刀剣騎士修道会はドイツ騎士修道会に併合され、ドイツ騎士修道会の分団＝リヴォニア騎士団になる。

ドイツ騎士修道会のはじまりは病院である。ドイツの貿易商たちが資金を供与してイスラーム軍との戦闘で負傷したドイツ兵を治療するための病院＝聖母マーリア病院をレヴァント地方のアッコに建設した。

１１９９年、ローマ教皇インノケンティウス３世が聖母マーリア病院を運営していた兄弟団＝ドイツ騎士修道会に十字軍遠征を要請する。ドイツ騎士修道会は、第４回十字軍に合流してエルサレムに向かう予定を立てたが、第４回十字軍はエルサレムに向かわずコンスタンティノープルに向かう。第４回十字軍がコンスタンティノープルを破壊してラテン帝国を開国したため、ドイツ騎士修道会はハンガリー王アンドラーシュ２世の招きに応じ、トランシルヴァニア地方に駐屯して異教徒＝キプチャク人と対峙する。

１２２４年、ドイツ騎士修道会の総長ヘルマン・フォン・ザルツァがトランシルヴァニア地方のプルツェンラントをローマ教皇庁の直領にし、「十字軍国家」を建設する許可申請をローマ教皇ホノリウス３世に提出した。だが、ホノリウス３世は同意したが、ハンガリー王アンドラーシュ２世が同意しない。ドイツ騎士修道会はプルツェンラントから撤退し、ポーランドのマゾフシェ公コンラート１世の招きに応じてプロイセン地方に駐屯する。そして、異教徒＝プロイセン人と対峙する。

１２２６年、ドイツ皇帝フリードリヒ２世がリミニの金印勅書を発布し、プロイセン地方のクルマーラント（ポーランド名ヘウムノ）をドイツ騎士修道会の領地として認める。他方、リューベクに帝国都市の地位を与え、フリードリヒ１世がリューベクに与えたと伝えられている特権を承認した（フリードリヒ１世がリューベクに与えたと伝えられている「特権」が実在したかどうかは疑いの余地があるが、ともあれリューベクはフリードリヒ２世の代に自治権と貨幣鋳造権、通商権を得る。その後リューベクはリューベク法を制定し、ドイツ諸侯による支配を遠ざけた）。

その後ヘルマン・フォン・ザルツァは、クルマーラントの経営およびプロイセン人との対峙を配下のヘルマン・バルクに委ね、自身はフリードリヒ２世に同行してドイツ王ハインリヒの反乱鎮圧に尽力する。彼はフリードリヒ２世の破門解除にも尽力した。そして１２３４年、ローマ教皇グレゴリウス９世がドイツ騎士修道会のクルマーラント支配、およびプロイセン地方全体の征服と征服地の所有を認める。ドイツ騎士修道会はリトアニア軍に敗北した刀剣騎士修道会を併合し、プロイセン各地に進軍して支配地域を拡大する。

１２３９年、ヘルマン・フォン・ザルツァが死去する。同年、ローマ教皇グレゴリウス９世がフリードリヒ２世を再度破門し、イタリア各地で皇帝派と教皇派の闘争がはじまる。他方、ドイツ騎士修道会は１２４２年のチュド湖の戦いでノヴゴロド公アレクサンドル率いる旧キエフ軍に惨敗する。

１２４０年、バトゥ率いるモンゴル軍がキエフ（キーウ）を占領して破壊した。バトゥはシチ川の戦いで戦死したウラジーミル・スーズダリ公ユーリー２世の弟ヤロスラフ２世にキエフ公国の統治を委ね、西方に進軍する。その後のレグニツァの戦い（ワールシュタットの戦い）とモヒの戦いはすでに述べたが、他方、ヤロスラフ２世は次男アレクサンドルにノヴゴロド公就任を命じる。ノヴゴロド公アレクサンドルは、ネヴァ河畔の戦いでスウェーデン軍を破り、さらにチュド湖の戦いでドイツ騎士修道会を破る（チュド湖の戦いは「氷上の戦い」と呼ばれ、セルゲイ・エイゼンシュテイン監督が製作した映画「アレクサンドル・ネフスキー」の戦闘シーンが有名であるが、実際の戦闘はアレクサンドルの人海戦術に怯えたドイツ騎士修道会がほとんど戦うことなく撤退したらしい）。

１２４３年、バトゥはヤロスラフ２世をウラジーミル・スーズダリ公に任じた。キエフ大公国の中心がキエフ公国からウラジーミル・スーズダリ公国に移動する（あるいは、キエフ大公国が「ウラジーミル・スーズダリ大公国」になった）。その後、ヤロスラフ２世は次男アレクサンドルと三男アンドレイを引き連れカラコルムに赴く。ヤロスラフ２世はグユクの大カン即位に参列し、おそらくアレクサンドルのノヴゴロド公就任とアンドレイのウラジーミル・スーズダリ公就任の承諾を得た。だが、帰路の途中で死去する。

ヤロスラフ２世が死去した２年後、大カン・グユクが死去する。グユクの死はおそらく暗殺で、黒幕はバトゥと次の大カン・モンケである。グユクの死後、アンドレイは反抗的になり、他方、アレクサンドルはバトゥに臣従する。

１２５２年、アレクサンドルは弟アンドレイを追放し、ウラジーミル・スーズダリ公を兼任する。アレクサンドルの死後、彼の末子ダニール・アレクサンドロヴィチがリューリク朝モスクワ公国を開国し、その後モスクワ公の縁者がノヴゴロド公を兼任するようになる。モスクワ公国は、ノヴゴロド公国の宗主国になり、民衆がノヴゴロド公を追放する場面がなくなる。しかし、ノヴゴロドの共和制は続いた（コラム６０）。

ちなみに、ノヴゴロド公兼ウラジーミル・スーズダリ公アレクサンドル＝アレクサンドル1世のモンゴル帝国およびジョチ・ウルスへの臣従を責めることはできない。ウラジーミル2世の死後、キエフ大公国は事実上解体し、キエフ地方が衰退した。1223年のカルカ河畔の戦いでは、各公国が連帯してモンゴル軍と戦ったが、その後連帯する場面がない。1238年のシチ川の戦いで、当時のウラジーミル・スーズダリ公ユーリー2世がモンゴル軍と戦い戦死したが、彼の戦力はドロフェイ・セミョーノヴィチが指揮する約3000名の兵士だけであった。カルカ河畔の戦い後、キエフ大公国は事実上消滅する。

他方、第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した後、ローマ・カトリック教会はギリシャ正教会を分離主義者と呼び異端視した。だが、モンゴル帝国はすべての信仰に寛容であった。アレクサンドル1世には、ギリシャ正教会を守る責務がある。それは、在住のスラヴ人＝ロシア人の共同体を守ることでもある。アレクサンドル1世はモンゴル帝国に臣従するしかなかった（コラム61）。

1380年のクリコヴォの戦い後、「タタールのくびき」が外れ、モスクワ公国が巨大化するが、それについては後述する。重要なことは、モンゴル帝国＝ジョチ・ウルスの支配地域が概ねキプチャク人が支配していた地域に止まった、ということである。すなわち、在住のスラヴ人＝ロシア人にとって、モンゴル帝国は外在する世界帝国であり、支配者であったが侵略者ではない。ジョチ・ウルスが「キプチャク・ハン国」と呼ばれるのはそのためでもあるが、モンゴル軍がウラル山脈以西で殺戮した人々の大半がキプチャク人であった。奴隷にされて売られたキプチャク人も多数いた。コラム59で述べたが、モンゴル軍の侵攻を食い止めたマムルーク朝のバイバルス（マムルーク朝5代スルターン）は奴隷にされて売られたキプチャク人である。カラーウーン（マムルーク朝8代スルターン）も奴隷にされて売られたキプチャク人である。

1242年、チュド湖の戦いでドイツ騎士修道会の敗退を知ったシフィエントペウク（ドイツ名スヴァントポルク）がプロイセン人を束ね、ダンツィヒ（現在のグダニスク）を拠点にして反乱を起こす。この反乱＝第1次プロイセン蜂起はシフィエントペウクとドイツ騎士修道会が平和条約（クリストブルク条約）を結ぶ1249年まで続く。そして、キリスト教への改宗を条件に、プロイセン人たちが自由を得る。その後、ドイツ騎士修道会は支配地域を北東に拡大し、1255年にケーニヒスベルク（現在のカリーニングラード）を建設する。

だが1260年、ドゥルベの戦いでドイツ騎士修道会がリトアニア軍に大敗した後、第2次プロイセン蜂起が勃発する。支配地域を拡大し兵力を分散していたため、ドイツ騎士修道会は各地の戦闘で敗退する。ローマ教皇ウルバヌス4世が十字軍遠征を呼びかけ、ドイツ各地の諸侯がプロイセンを目指す。第2次プロイセン蜂起は1274年まで続き、ドイツ騎士修道会と十字軍は多数のプロイセン人を殺戮した。その後第3次プロイセン蜂起が勃発したが、プロイセン人は死者を増やすだけであった。プロイセン人の反乱は1282年頃に終結する。生き残ったプロイセン人の大半がリトアニアに逃れ、彼らが住んでいた土地がドイツ人の植民地になり、北方十字軍国家になる。

ドイツ騎士修道会が支配する北方十字軍国家は、1410年のグルンヴァルトの戦い（タンネンベルクの戦い）で大打撃を被り縮小するが、それについては後述する。注視すべきことは、リガ、タリン、ケーニヒスベルク、ダンツィヒといったバルト海沿岸都市がドイツ騎士修道会の支配下に入り、帝国都市リューベクと同盟＝ハンザ同盟を結んだことである。その後バルト海沿岸都市はリューベク法を導入して自治を確立した（しかしシュチェチンとケーニヒスベルクはドイツ都市法＝マクデルブルク法を導入している）。また、ハンザ同盟はロンドンとノヴゴロド、フランドル地方のブルッヘ、ノルウェーのベルゲンに商館を置いた。そしてハンザ商人（ハンザ同盟の個人商人）がバルト海貿易を支配する。

当時の「ロシアの玄関口」はノヴゴロドである。ハンザ商人の商船がバルト海を越えてネヴァ川を上り、ラドガ湖を渡ってヴォルホフ川を上り、イリメニ湖を渡ってノヴゴロドで商いを行った。ちなみに、当時のロシアの主要な輸出品は毛皮と木材、蜜蝋である。蜜蝋は教会のロウソクで使用した。

筆者の認識では、「広義の近代」はバルト海沿岸からはじまる。イタリアからはじまったルネサンス運動は、「広義の近代」の出現期の産物ではなく、「広義の中世」の成熟期の産物であると考えるほうが妥当であるかもしれない。平たくいえば、地中海沿岸よりバルト海沿岸のほうが新しい。バルト海沿岸は当時のヨーロッパのフロンティアであり、次のフロンティアが北米大陸や中南米大陸、カリブ海諸島になったと論じる歴史家や社会学者もいる。

ちなみに、バルト三国（リトアニア、ラトビア、エストニア）の森林＝原生林は今も深い。西ヨーロッパ域内の開墾が概ね終わり、新たな開墾地を求めて北方十字軍遠征や北方十字軍国家の建設が行われたとすれば、成果は芳しくなかったというしかない。おかげでバルト三国に10世紀以前のヨーロッパの自然が残った。

（ハンザ商人がノヴゴロドと交易をはじめた12世紀後半頃、ゴットランド島のヴィスビューが中継地としての役割を担っていたが、13世紀後半頃からダンツィヒ等が中継地としての役割を担う。とはいえ、ヴィスビューは衰退しなかった。ゴットランド島はバルト海最大の島で、島の面積は沖縄本島の約2．5倍である。ゴットランド島は農耕が可能で塩山もある。ゴットランド島に移住したドイツ人が生産する小麦や塩がヴィスビューを支えた）

コラム60： ノヴゴロドの民主共和制

歴史家や社会学者たちが、商業都市であったため、ノヴゴロドで共和制が誕生した、と論じる場合がある。だが、ノヴゴロドで共和制がはじまるのはノヴゴロドが商業都市化する前である。ノヴゴロドの共和制は進化し、14世紀後半頃に「民主共和制」になる。すなわち、貴族階級だけでなく、民衆（ただし一定の身分を持つ商工業者等）も市長を選出するようになる。

封建制＝アリストクラシーと近代民主制＝デモクラシーが同時代に誕生し、しかも民主制が誕生した場所はロシアのノヴゴロドである。ノヴゴロドは、毛皮だけでなく共和制と民主制も輸出した。ビザンツ帝国との関係が深く、キエフ大公が「立法者」であったことが、ノヴゴロドの共和制を可能にしたのかもしれない。民主制については、国教会がギリシャ正教会であったことがおそらく大きい。ギリシャ正教会の司祭たちは、ギリシャ語と古代ギリシャの文献に精通していた。彼らは、古代アテネの民主制を熟知していた。ノヴゴロドの民主共和制は、1477年にモスクワ大公イヴァン3世がノヴゴロドを併合するまで続く。

ちなみに、ノヴゴロドの「方言」は東スラヴ語より西スラヴ語に近いとの説がある。ポーランドの歴史家やポーランド史の専門家は認めないと思うが、後のポーランドのシュラフタ民主制（貴族民主制）はノヴゴロドの民主共和制の模倣かもしれない。

コラム61： 東方正教会

歴史家の杉山正明氏は、著書「モンゴル帝国の興亡＜上・下＞（講談社現代新書）」で、ノヴゴロド公兼ウラジーミル・スーズダリ公アレクサンドル＝アレクサンドル1世を狡猾で卑怯な人物であるかのように論じている。だが、アレクサンドル1世にとって守らなければならないものは事実上消滅したキエフ大公国ではない。守らなければならないものはギリシャ正教であった。それはロシア人の共同体を守ることでもあった。

第4回十字軍がコンスタンティノープルを破壊した後、カトリック教会はギリシャ正教会を分離主義者と呼び異端視する。カトリック教会の異端敵視は激化した。山内進氏の著書「北の十字軍（講談社学術文庫）」によれば、インノケンティウス3世の死後、ローマ教皇に就任したホノリウス3世（在位1216～1227年）は以下のように述べ、スウェーデン軍とドイツ騎士修道会のノヴゴロド侵攻を後押ししている。

「余は命ずる。ロシア人たちはローマ教会から離れてギリシャ人たちの儀式（ギリシャ正教会の儀式）に従ってきた。まさにその地において、カトリックの儀式に従うよう強制されねばならない」

ネヴァ河畔の戦いとチュド湖の戦いの後も、旧キエフ軍とポーランド・ハンガリー連合軍の激しい戦闘が勃発している（1245年のヤロスラヴの戦い）。カトリック勢力がロシアの大地を蹂躙しようとしていた。そのような場面で、ギリシャ正教会を容認するモンゴル帝国に敵対するのは馬鹿げている。アレクサンドル1世には、モンゴル帝国＝ジョチ・ウルスに臣従する以外に選択肢がなかった。

（バトゥの死後、ジョチ・ウルスのカンに即位したベルケは熱心なイスラーム教徒で、旗下のモンゴル兵全員にイスラーム教への改宗を命じたが、他方、サライでのギリシャ正教会の設置を認めている。ちなみに、ヴォルガ川の上流がウラジーミル・スーズダリ公国である。サライに東方の富＝物産を集積すれば、ヴォルガ川経由でウラジーミル・スーズダリ公国とノヴゴロド公国に輸送できる。また、陸路でクリミア半島沿岸にも輸送できる。サライはバルト海貿易と黒海・地中海貿易の拠点都市になり、商品経済の下で人口60万を越える大都市に発展した）

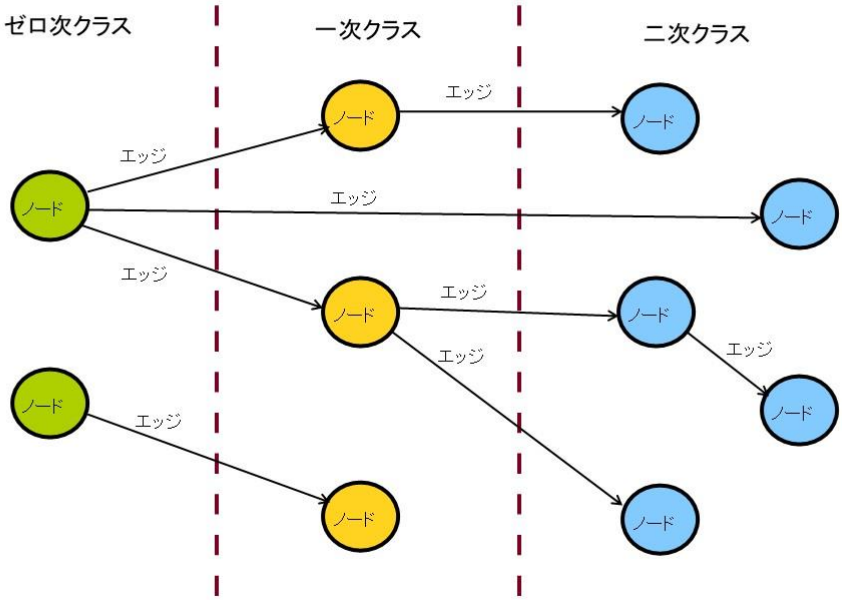
1261年、パレオロゴス朝ビザンツ帝国が誕生する。パレオロゴス朝ビザンツ帝国は「小国」であったが、地中海と黒海を結ぶボスポラス海峡とダーダネルス海峡を支配した。そしてギリシャ正教会を支え、ロシア人とロシアの可能性を高める。以後、正教会＝オーソドックスを「東方正教会」と呼ぶ。

ちなみに、ネヴァ川とラドガ湖、ヴォルホフ川とイリメニ湖は重要な「シーレーン」であったため、ロシアとスウェーデンの争奪地になる。この「シーレーン」は17世紀の北方戦争と18世紀の大北方戦争を考察する上で不可欠な条件であり、クラウゼヴィッツが「戦争論」を執筆する場面で参照した理由もそこにある。むろん、鉱物資源が豊富なカレリア地方の争奪も見落とせない。

５．５　商品経済

商品経済は下図（図12）のように三つのクラスのノード、それらノードをつなぐエッジ＝辺を組み合わせた有向グラフのモデルで表現できる。

図12　商品経済の構造



上図の各ノードは「商品」を意味する。ゼロ次クラスのノード＝ゼロ次商品は素材商品である。すなわち、穀物や木材、鉄等である。ふつう、素材商品は加工品ではない。したがってゼロ次商品というしかないのだが、とはいえ商品化する場面で人的作業が生じる。たとえば、コメを商品化するには乾燥して脱穀する必要があるし、小麦を商品化するには小麦粉に製粉する必要がある。伐採した原木を商品化するには製材する必要があるし、採掘した鉄鋼石を商品化するには製鉄する必要がある。同じことがサトウキビや肉類、石油等についてもいえる（ゼロ次商品がそのまま商品化する場合もある。たとえば、イモ類や魚介類、天然ガス等はそのまま商品化する場合が多い）。

一次クラスのノード＝一次商品は加工品＝一次加工品である。一次商品はゼロ次商品を消費して生産する。したがって、一次商品とゼロ次商品の関係を上図のような向きを持つエッジ、すなわち有向グラフで表現できる。パンやバター、ジャム、ハムやソーセージ等は一次商品である。木製の椅子や机、鉄製のネジや釘、プラスチック製の食器等も一次商品である。

二次クラスのノード＝二次商品は二次加工品である。ふつう、二次商品は一次商品を消費して生産するが、ゼロ次商品を消費して生産する場合もある。重視すべきことは、二次商品を消費して二次商品を生産する場合もある、ということである。飛行機や船舶、自動車や家電製品は二次商品であり、パーソナル・コンピュータやスマート・フォンも二次商品である。どれだけ大型化しても高度化しても、二次商品は二次商品である。

（商品クラスの考えを基準にすると、排熱や廃物を利用して再生産するゼロ次商品や一次商品、二次商品が三次商品になる。現状、中古品やリサイクル品が三次商品であるが、2020年頃からはじまる第三次産業革命の突破期に新たな三次商品が誕生して普及すると筆者は予想する）

ところで、経済学者は、上図の各エッジ＝辺は物流を意味する、と論じるかもしれない。だが、そのような認識の下で経済を考察できるのは市場経済が誕生して露呈した後である。商品経済が誕生した頃（すなわち「広義の近代」の出現期前半）のエッジは人間である。「広義の近代」の出現期前半は、商人自身が商品を運送していた。

（現代社会のエッジは運送や流通に携わる人々の人間労働であるが、顧客を獲得した自動車のセールスマンが自身で車を運転して配車する場合がある。筆者は、企業の営業マンや保険の外交員等もエッジであると考える。余談であるが、故廣松渉氏がしばしば語った「物象化」の考えは、エッジも人間や人間労働であるとの認識が欠落してい

るように思う）

前節で述べたハンザ商人は自身で商品を運送していた。バルト海貿易で西から東に輸送する主な商品は毛織物と塩である。東から西に輸送する主な商品は毛皮や蜜蝋である。だが、やがて木材や小麦になる。そして琥珀や銅、スカンジナビア半島で採掘する鉄鋼石等も主要商品になる。鉱石レベルであったが、鉄の海上輸送がはじまった。

ハンザ商人の活躍を快く思わない勢力もいた。デンマーク王国である。デンマークの主要な輸出品は牛であったが、陸路でドイツ各地に輸送していた。他方、デンマークは艦隊を保有し、バルト海の制海権とバルト海貿易の支配を窺っていた。

1360年、デンマーク艦隊が突如スカンジナビア半島南部の漁場を襲い、翌1361年にゴットランド島のヴィスビューを占領する。そしてハンザ商人のノヴゴロド交易を遮断した。1362年、ハンザ同盟は連合艦隊を編成し、リューベク市長ヨハン・ヴィッテンボルクが総指令に就任してヴィスビュー奪還を試みる。だが、連合艦隊は惨敗する。しかし1368年、ハンザ同盟は新連合艦隊編成し、新リューベク市長ブルーノ・ヴァーレンドルプが総指令に就任してデンマークの首都コペンハーゲンを襲撃する。1370年、デンマーク王ヴァルデマー4世はハンザ同盟と平和条約（シュトラールズント条約）を締結し、ヴィスビューから撤退した。自身で商品を運送していた商人は、エッジの実体であったが、武人でもあった。ハンザ同盟の対デンマーク戦争は彼らが武人であることを証明している。

ところで、シュトラールズント条約を締結する場面で、ハンザ同盟は領土を要求していない。ハンザ同盟がデンマークに要求したのは、海運の安全と自由、船舶の損害賠償だけである。歴史家たちは、ハンザ同盟が領土を要求しなかったことを称賛し、商業都市の同盟を高く評価する。だが、筆者の認識では、ハンザ同盟が領土を要求しなかったのは、商業都市同盟であったからではない。ハンザ同盟を構成する各都市はドイツ帝国の一部である。そして、ドイツ帝国で他国に領土の割譲を要求できるのはドイツ皇帝だけである。ハンザ同盟は、領土を要求しなかったのではなく、できなかったのである。

ちなみに、ハンザ同盟、あるいはハンザ同盟の盟主リューベクが海洋国家であったということはできない。そもそも、海運や海軍だけを基準にして海洋国家を論じることができない。筆者は、海洋国家であるか否かは陸の支配体制を海洋に拡大するか否かにあると考える。筆者の認識では、1429年にデンマーク王エーリク7世がエーレスンド海峡の通行税を制定した後、ヨーロッパで陸の支配体制が海に拡大しはじめる。すなわち、「海洋国家」が誕生するのは15世紀以降で、14世紀に勃発したハンザ同盟の対デンマーク戦争は海洋国家が誕生する前の戦争である。アジアで陸の支配体制が海に拡大しはじめるのは16世紀末からで、それについては後述するが、ヨーロッパよりかなり遅い。

コラム62： カルマル同盟

ハンザ同盟に敗北したが、デンマーク王ヴァルデマー4世は名君であったといわれている。彼はデンマークの中央集権体制を確立した。だが、真に「名君」の名に値するのは彼の末娘マルグレーテかもしれない。彼女は1397年にデンマークとスウェーデン、ノルウェーの同君連合＝カルマル同盟を結成し、三国を事実上支配する。

その後1520年にストックホルムの血浴事件があり、1523年にグスタフ・ヴァーサがスウェーデン王グスタフ1世に即位する。エーリク7世が制定したエーレスンド海峡の通行税撤廃を求めるリューベクはスウェーデンを支援した。スウェーデンが独立し、カルマル同盟は崩壊したが、デンマークは伯爵戦争（1534～1536年）でリューベクに雪辱し、その後オランダがバルト海貿易を支配する。

16世紀のハンザ商人は、商品の輸送に直接関与しなくなっていた。彼らは帳簿を管理し、商品の搬入と搬出を指図するだけの存在になっていた。伯爵戦争は、デンマークにとって「楽な戦争」であったかもしれない。その後のデンマークは1612年にデンマーク東インド会社を設立し、通商国家に変貌する。

５．６　世界帝国の誕生

即位後、大カン・モンケ（在位１２５１～１２５９年）は粛正を行い、官僚機構を整備してモンゴル帝国の中央集権体制を強化する。「大粛正」下でオゴディ家の勢力が縮小し、天山山脈以北に押し込められた。また、反抗的なチンギス・カンの次男チャガタイの家系がイリ川以西＝トランスオクシアナ地方に押し込められた。以後、モンゴル帝国はチンギス・カンの四子（ジョチ、チャガタイ、オゴディ、トルイ）のうち、末子トルイの家系が支配する。

モンケの代はトルイの四子（モンケ、クビライ、フレグ、アリクブケ）がモンゴル帝国を支配した。とはいえ、ジョチ家を継ぐバトゥとチンギス・カン諸弟の家系＝東方三王家を束ねるタガチャルは例外である。モンケはジョチ・ウルスの開国を認め、東方三王家の遼河流域と沿海州、および河北の一部支配を認める。

大粛正後、モンケはクビライに南征を命じ、フレグに西征を命じる。クビライは現在の内モンゴル自治区ドロンノール県に拠点（以後、「上都」と呼ぶ）を建設し、軍を編成して関中に向かう。すでに述べたが、モンゴル軍はオゴディの代に南宋軍に大敗した。敗因を熟考したクビライは騎兵と歩兵の混成軍を編成する。そのため、行軍が遅くなる。しかもクビライは荒廃した淮北を横断することも長江を越えることも無理と判断し、大理国からの侵攻を考えた。

クビライは関中から現在の雲南省に向かい、大理国に侵攻してその地を支配する。そして、その後の統治を副将ウリャンカダイに委ね、自身はいったん上都に帰還する。おそらく、新たな軍を編成して再度南下し、自軍が南宋軍を引き寄せ、ウリャンカダイ下のモンゴル兵が大理国から南宋の首都臨安（現在の杭州市）に侵攻する作戦を立てていたように思う。だが、悠長な戦略にモンケが激怒する。

モンケはクビライを南征軍総司令から外し、自身が軍を編成して現在の四川省に進軍する。他方、タガチャルに江南制圧を命じる。だが、タガチャルは襄陽（現在の湖北省襄陽市）まで進軍するが、立往生して撤退する。激怒したモンケはクビライに江南制圧を命じ、タガチャルに南宋の首都臨安への直接侵攻を命じる。

クビライとタガチャルはうんざりしたと思う。両名とも漢人の側近を多数抱え、南宋の兵力と財力に精通している。しかしモンケの側近はペルシャ人だらけである。だが、両名にとって幸いなことに、モンケは四川省で病死する（モンケの死は暗殺と無縁である。モンケはユークリッド幾何学にも精通していた「学」の人であった。彼は遠征に耐える体力を持ち合わせていなかったように思う）。

モンケの死後、クビライとアリクブケの抗争がはじまるが、それについて述べる前に西征したフレグについて述べる。フレグ率いる西征軍はホラーサーン地方を目指した。途中、ジョチ・ウルスやトランスオクシアナ地方のモンゴル兵が合流し、西征軍は巨大化する。

当時、イスマーイール派の分派＝ハザール派教団がイラン高原北部のアルボルズ山脈内に砦を築き、共同生活を営んでいた。サマルカンドに到着したフレグは、彼らが大カン・モンケの暗殺を企てたこと、西征の目的は彼らを葬り去ることであり、各地の諸侯も合流して異端の抹殺に協力するよう呼びかけた。

まず、ルーム・セルジューク朝スルターン率いるルーム・セルジューク軍が合流する（コラム５８述べたが、ルーム・セルジューク朝は１２４３年のキョセ・ダグの戦いでモンゴル軍の別働隊に惨敗し、モンゴル帝国に服属していた）。他の地方からもイスラーム諸侯が合流する。フレグは大軍でハザール派教団の砦を包囲し、包囲の輪を徐々に縮小して圧迫した。ハザール派教団の教主フルシャーは降伏し、その後西征軍はメソポタミアに向かいバグダードを占領してアッバース朝カリフを殺害する。１２５８年、アッバース朝は名実ともに滅亡した（ちなみに、アッバース朝カリフ殺害の原因は「感情の縺れ」であったらしい。フレグが率いる西征軍＝モンゴル軍がバグダードで殺戮を行い、カリフを殺害して「知恵の館」も破壊したと論じる歴史家もいるが、疑わしい）。

西征軍はその後レヴァント地方に侵攻し、アレッポを陥落する。だが、大カン・モンケが南征中に死去したため、フレグは軍の一部をキト・ブカに預け転進する。バイバルス下のマムルーク軍がキト・ブカ下のモンゴル軍を殲滅したことはコラム５９で述べたが、フレグは報復できなかった。フレグは、クビライが上都でクリルタイを開き、大カンに即位したことを帰路の途中で知る。クビライとアリクブケの抗争は必定で、フレグはトランスオクシアナ以西に残留し、モンゴル帝国の行方を見守るしかなかった。その判断は妥当であるが、フレグは大きな間違いをひとつした。

フレグは、タブリーズ（カスピ海東南のイランの古都）を拠点にして残留する。そのためジョチ・ウルスのベルケ・カンが激怒する（バトゥが１２５６年に死去したため、バトゥの弟ベルケがジョチ・ウルスのカンに即位した）。なぜなら、ベルケはコーカサス地方全域とアルメニアや小アジアの支配を目指していたからである。

（パレオロゴス朝がビザンツ帝国を再興している。版図内に多数の東方正教徒＝ロシア人を抱えるベルケにとって、聖地コンスタンティノープルの保護は責務であり、小アジア等を支配下に置く必要があった。しかも、ベルケは熱心なイスラーム教徒である。ベルケとって、アッバース朝カリフの殺害は許せない行為であったかもしれない。ちなみに、フレグの西征軍に合流したジョチ・ウルス出身のモンゴル兵たちは、マムルーク朝に逃れ、ビザンツ帝国を経由して帰国している）

ベルケは大軍を率いて南下する。フレグも大軍を率いて応戦する。ベルケとフレグの抗争がはじまった。それと並行してクビライとアリクブケの抗争もはじまる。

クビライは、漢江を渡り長江を渡ろうとした場面でモンケの死を知る。だが、クビライは帰還しない。クビライはそのまま長江を渡り、大理国で駐屯していたウリャンカダイ率いるモンゴル兵の帰りを待つ。さらに四川省で展開していた故モンケの遠征軍本隊を吸収し、南宋の宰相賈似道と和議を結ぶ。その後北進してタガチャルとも合流する。そして上都でクリルタイを開き、大カンに即位する。他方、モンケの遺臣たちはトルイの末子アリクブケを推戴する。アリクブケはモンケの葬儀を済ませた後、カラコルムでクリルタイを開く。アリクブケも大カンに即位した。

歴史家や社会学者たちは、遊牧民の社会は部族間の合議で成り立っており、クリルタイは部族間の政治的な会議の場であったと論じている。彼らの考えにしたがえば、クビライが開いたクリルタイは非正式なクリルタイで、アリクブケが開いたクリルタイが正式なクリルタイである。すなわち、モンゴル帝国の正当な大カン後継者＝帝位後継者はアリクブケであり、クビライは帝位簒奪者である。

だが、遊牧民社会が部族間の合議で成り立っているとしても、クリルタイが部族間の政治的な会議の場であったとの確証がない。クリルタイは、おそらく軍議である（現実に、モンゴル帝国はクリルタイを開いた後に遠征をはじめている）。軍議である以上、クリルタイはどこで開いてもよいし、軍議に正式も非正式もない。ようは多数の部族長と多数の軍団、多数の兵士が集まればよいのである。クリルタイで即位する大カンは、平たくいえば「大元帥」である。

それぞれ大カンに即位したクビライとアリクブケの抗争がはじまったが、戦闘はクビライ側が一方的に押し込んでいる。クビライは、おそらくモンケの死を知ったときからアリクブケと一戦交える覚悟を固めていた。したがって、帰還を遅らせ、大軍を組織した。しかも、兵糧＝穀物等の産地はモンゴル高原ではなく河北である。クビライは決戦の場面（シムルトゥ・ノールの戦い）で「鶴翼の陣」を構え、飢えに苦しむアリクブケ下のモンゴル兵を包み込もうとしている。アリクブケは後退を繰り返し、１２６４年に降伏した。アリクブケの降伏が意外に遅いのは、クビライが同胞の殺害を極力避けたためである。

アリクブケ降伏後、クビライは帝都をカラコルムから上都に遷都する。そして、ベルケとフレグに停戦を命じ、クリルタイ開催を通知して上都に赴くよう命じる。また、アリクブケに反旗を翻しトランスオクシアナ地方を支配していたチャガタイ家のアルグにも上都に赴くよう命じる。

だが、フレグは１２６５年に死去し、ベルケが１２６６年に死去する。同じ頃、アルグも死去する。後の三大ウルス（ジョチ・ウルス、フレグ・ウルス、チャガタイ・ウルス）の当主がほぼ同時に死去したため、クビライはクリルタイを開催できなかった。クビライはジョチ・ウルスとフレグ・ウルスの開国を認め、チャガタイ家傍流のバラクをトランスオクシアナ地方＝チャガタイ・ウルスに送り統治を委ねる。だが、開国を認めるということは、仕送りを停止あるいは削減する、ということでもある。バラクをトランスオクシアナ地方に送ったのも、チャガタイ・ウルスへの仕送りを停止あるいは削減するためであったと思う。

（仕送りを停止あるいは削減しなければ、その後の南宋遠征が容易にやれない。歴史家や社会学者の一部が、モンゴル帝国を「通商帝国」と呼び、陸運と海運が世界帝国＝モンゴル帝国を支えたと論じている。しかし、クビライが大カンに即位した頃の陸路は兵站路である。すなわち、中央アジアや西アジア、ユーラシア大陸西北部等で展開するモンゴル軍に河北の富＝農産物等を輸送するための陸路である。ジョチ・ウルスもフレグ・ウルスも、チャガタイ・ウルスも大カンの仕送りに頼っていた）

モンケの代に事実上開国していたジョチ・ウルスの場合、仕送りの停止や削減が大きな苦痛になる場面はなかった。フレグ・ウルスには厳しい措置であったかもしれないが、途中で合流したモンゴル兵が帰還し、兵員が減少している。フレグ・ウルスは、メソポタミアやイラン高原の富＝農産物等で残った兵員を養うことができた（そもそも、フレグ・ウルスの兵員は大多数がペルシャ人である）。しかし、バラクは仕送りに頼ることなくトランスオクシアナ地方＝チャガタイ・ウルスを統治しなければならない。だが兵員の維持は容易でない。バラクはフレグ・ウルスに侵攻する。

フレグの死後、彼の長男アバカがカンに即位して当時のフレグ・ウルスを統治していた。１２７０年、ホラーサーン地方のカラ・スゥ平原でバラク下のチャガタイ・ウルス軍とアバカ下のフレグ・ウルス軍が激突する。撤退を装いながら奇襲を仕かけたアバカが勝利し、バラクは敗走して翌１２７１年に死去する。その後オゴディ家の当主カイドゥがチャガタイ・ウルスを支配する。

バラク率いるチャガタイ・ウルス軍が侵攻した場面で、ルーム・セルジューク軍がフレグ・ウルス軍に合流している。当時のルーム・セルジューク軍は事実上の「ビザンツ軍」である。アバカは、ルーム・セルジューク兵が騎乗するビザンツ産大型馬の脚力を生かし、奇襲を仕かけた。その後アバカ率いるフレグ・ウルス軍はレヴァント地方でカラーウーン（マムルーク朝第８代スルターン。コラム５９で述べたバイバルス同様、モンゴル軍に殺戮されたキプチャク人部族の出身である）率いるマムルーク軍との戦闘を繰り返す。互いに大型馬を有する騎馬軍団の戦闘は壮絶であったと思うが、フレグ・ウルス軍は１２８１年のホムスの戦いで大敗する。そして翌１２８２年、アバカが死去する。

ちなみに、アバカの妻はビザンツ皇帝ミカエル８世が下嫁した皇女デスピナである。おそらく、アバカはネストリウス派キリスト教徒であった（フレグもネストリウス派キリスト教だったかもしれない）。アバカとデスピナの夫婦仲は良く、フレグ・ウルスの兵たちはデスピナを敬愛した。

（アバカの死後、デスピナはコンスタンティノープルに戻り修道院生活を送るが、事実上のカンとして当時のジョチ・ウルスに君臨していたノガイの妻もミカエル8世が下嫁した皇女エウフロシュネーである。アバカにとってもノガイにとっても、クビライは大きな存在ではなかったように思う。ミカエル8世こそが敬愛すべき皇帝であり、「父」である。アバカとノガイは互いに義父を敬い、フレグ・ウルスとジョチ・ウルスの敵対関係を解消した。アバカが死去した同年、テッサリアで反乱が勃発し、ミカエル8世がトラキア戦役で死去する。ノガイは援軍を送ったが、間に合わなかった）

1295年、アバカの孫カザンがフレグ・ウルスのカンに即位し、イスラーム教に改宗する。だが、彼はビザンツ帝国との友好を続ける。パレオロゴス朝ビザンツ帝国はフレグ・ウルスから古代ギリシャの哲学や自然学、ヘレニズム期のストア哲学や新プラトン主義を「輸入」した。

東ローマ皇帝ゼノンがコスタンティノープルからネストリウス派キリスト教神学者を追放し、サーサーン朝ペルシャが彼らを受け入れたことはすでに述べた。彼らはジュンディーシャープール学院で暮らし、古代ギリシャの哲学等を編纂した。その後ユスティニアヌス1世がアカデメイアやリュケイオンの哲学者や自然学者を追放したが、サーサーン朝ペルシャは彼らも受け入れる。彼らも古代ギリシャの哲学等を編纂した。そして、彼らの後継者たちが、アッバース朝期にバグダードの「知恵の館」に移る。その後原理主義者ムタワッキルがダマスカスに遷都した場面で、おそらくタブリーズとその周辺に逃れた。

サーサーン朝ペルシャでは、タブリーズとその周辺（オルーミーイェ等）はゾロアスター教の聖地である。そして、アッバース朝は、イスラーム教徒に布教しないという条件を付けて、ゾロアスター教や他の信仰を容認した。アッバース朝期に、タブリーズとその周辺が異教徒や異端信徒、哲学者や自然学者の避難所（アジール）になる。

タブリーズとコスタンティノープルは近い。そしてパレオロゴス朝ビザンツ帝国も異教や異端に寛容である。フレグ・ウルスから古代ギリシャの哲学等を「輸入」したパレオロゴス朝ビザンツ帝国が、それらを西ヨーロッパに「輸出」し、後のルネサス運動を促進する。

（フレグ・ウルス滅亡後、タブリーズとその周辺の歴史は破壊と略奪の歴史になる。現在のタブリーズはイラン・イスラーム共和国の都市のひとつで、人口は約146万、住民の大多数がアゼルバイジャン人でシーア派イスラーム教徒である。ゾロアスター教会やネストリウス派キリスト教会の痕跡は見当たらない。ちなみに、アゼルバイジャン＝アーザールバーイジャーンはペルシャ語である。意味は「火の国」）

他方、アリクブケを討伐したクビライは四男ノムガンと右丞相アントンを中央アジア（イリ川流域のオアシス都市アルマリク）に送り、カイドゥの「謀反」をけん制した後、モンゴル兵と漢人兵をひとつにまとめ南征に投入する。1268年、約10万の南征軍が南宋のふたつの要塞（南宋が長江と漢江が合流する地点に建設した襄陽と樊城）を包囲した。そして約5年間包囲し続ける。要塞への砲撃が決め手になった。1273年、補給を断たれ援軍も断たれたため、ふたつの要塞を死守していた呂文煥が降伏する。翌1274年、クビライは南宋制圧を決心する。左丞相バヤン率いる南征軍が南宋の首都臨安を陥落した。

（臨安を陥落したバヤン下の南征軍が略奪を行わなかったことは特筆に値する。クビライは略奪を戒めていたようだが、彼の次男チンキムと漢人ブレーンの姚枢がクビライ以上に戒めていた。当時のモンゴル帝国にとって必要なものは、臨安の「財」ではなく、江南の「富」であり、略奪を行わなかったことが江南の地の平和的支配を可能にする）

だが、南宋制圧後、アントンに従軍していたモンケの四男シリギが反乱を起こし、ノムガンとアントンを捕縛する。南宋を制圧したバヤンが急遽北伐軍を編成し、中央アジアに赴く。シリギはノムガンをジョチ・ウルスのモンケ・テムル（バトゥの孫。ベルケの死後、ジョチ・ウルスのカンに即位した。ベルケ同様熱心なイスラーム教徒で、サライを大都市に発展させた。彼は1280年に死去し、その後ノガイが事実上のカンになる）の元に送り、アントンをカイドゥの元に送って援軍を要請した。だが、モンケ・テムルもカイドゥも援軍を派兵しない。シリギ下の反乱軍はバヤン下の北伐軍に打ちのめされ自壊する。シリギは捕らえられ流罪になったが、その後カイドゥが中央アジアを支配する。

ところで、南宋制圧後、クビライは東シナ海沿岸都市の交易を重視したが、歴史家や社会学者たちは、アラビア商人やペルシャ商人との交易を重視したためである、と論じている。だが、大きな理由が他にある。南宋の富＝物産は莫大で、とりわけ江南は米と絹織物、塩の産地であった。しかし、淮北は荒廃している。他方、すでに建設を開始していた新都（大都。現在の北京市）は運河を使って渤海湾の拠点（現在の天津市付近）から物資を搬入する仕組みが整っている。したがって、江南の米や絹織物、塩は陸路より海路で河北に輸送するほうが妥当である。とはいえ、おそらく上都と大都、およびその周辺地域が江南の富＝物産を独占した。それが後に災いの種になる。

クビライは南宋制圧を決断した場面で、二度目の日本遠征も決断している。1281年、高麗の合浦（現在の昌原市。2010年まで馬山市であった）から900隻の艦隊が日本を目指して出港する。そして臨安に隣接する慶元（現在の寧波市）から3500隻の大艦隊が日本を目指して出港する。兵員は総勢15万で、大多数が高麗兵と旧南宋兵であった。第2回日本遠征軍は惨敗するが、クビライが得た痛手ではさほど大きくない。南宋制圧後、クビライは40万の旧南宋軍を無傷のまま得ていた。クビライは三度目の日本遠征の準備に取りかかる。だが、1287年に東方三王家の大反乱が勃発し、三度目の日本遠征が頓挫する。

歴史家の杉山正明氏は、日本遠征のための造船で遼河流域や沿海州の森林を伐採したこと、遼河流域や沿海州の民衆に賦役を課したことが大反乱の原因であったと述べている。だが、遠征軍が出港する場所は合浦と慶元であり、造船もその近辺で行われたはずである。したがって、造船で使用する木材は長江流域や韓半島の森林を伐採して使用するほうが合理的である。また、遼河流域や沿海州の人々が技術を要する造船作業に従事するのは困難である。筆者は、東方三王家の大反乱は、上都と大都、その周辺地域が江南の富＝物産を独占したため生じたと推理する（ただし、本当に遼河流域や沿海州の森林を伐採して造船で使用したとすれば、輸送で要する労力は莫大になると考えられ、杉山氏の言説が当てはまる）。

上でタガチャルが東方三王家を束ねたと述べたが、タガチャルは1278年に死去し、嫡子のアジュルも死去する。その後、タガチャルの孫ナヤンが東方三王家を束ねる。1287年の大反乱の中心人物はナヤンである。しかも中央アジアを支配するカイドゥがナヤンに迎合する。クビライは生涯最大の危機に陥った。

当時、クビライの正室チャブイが生んだ息子たち（ドルジ、チンキム、マンガラ、ノムガン）は全員死去している。クビライの下に精強な親衛軍と高麗軍、40万の旧南宋軍が存在していたが、大軍を指揮する総司令が不在であった。結局、クビライが総司令に就き、戦象に乗って戦う（クビライは1215年生まれなので、当時の年齢は72歳である）。大反乱は約1カ月で終息し、東進していたカイドゥは引き返す。ナヤンは捕らえられ撲殺された。その後、東方三王家の一角を占めていたカダアン率いる軍勢が遊撃戦を続けるが、1292年頃に消滅する（コラム63）。

アリクブケ討伐後、クビライはジョチ・ウルスとフレグ・ウルスの開国を認め、大都の建設を決断し、国号を定める。クビライが定めた国号は「大元」である。クビライは版図内でジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、大元ウルス（以後、慣例にしたがい、大元ウルスを「元」あるいは「元朝」と呼ぶ）が鼎立する世界帝国の建設を目指していた。クビライが描いた絵にしたがえば、トランスオクシアナ地方を含む中央アジアは元の一部でなければならない。「大反乱」後、クビライは元朝の執政に専念し、1294年に死去するが、彼の意思は残る。

モンゴル帝国が遼＝契丹の継承国であるとすれば、耶律大石が建国した旧西遼の地は大カンが支配しなければならない。したがって、テムジン＝チンギス・カンはトランスオクシアナ地方まで支配した。時代が変わってもトランスオクシアナ地方は大カンの支配地である。クビライの死後、チンキムの三男テムルが大カンに即位する。テムルは凡庸であったが、元の統治体制は完成していた。元朝はトランスオクシアナ地方を含む中央アジアの支配を目指す。とはいえ武力を行使する必要はない。江南の富＝物産を分配して支配すればよい。

テムル即位後、カイドゥ下のモンゴル部族の一部が元朝に帰順した。カイドゥに焦りが生じる。1300年、カイドゥは東征を開始する。モンゴル高原とタリム盆地でカイドゥ下のチャガタイ・ウルス軍と元軍の戦闘が勃発したが、元には40万の旧南宋軍が存在する。圧倒的な軍勢の前に、カイドゥ下のチャガタイ・ウルス軍は惨敗した。1301年、カイドゥが戦死し、オゴディ家に支配されていたチャガタイ家が浮上する。チャガタイ家の当主ドゥアはテムルに臣従し、オゴディ家を根絶やしにする。

ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、元が鼎立する「世界帝国」が完成したが、1307年にテムルが死去する。中央アジアを統治していたカイシャン（テムルの兄ダルマバラの長男。カイドゥとの戦いで奮戦し、カイドゥの死後、中央アジアを統治していた）が急遽上都に赴き、大カンに即位する。そして中央アジアの独立、すなわちチャガタイ・ウルスの開国を承認した。世界帝国＝モンゴル帝国は四つの国（ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、チャガタイ・ウルス、元）の連邦になる。

ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、元が鼎立した後、クビライは商税を制定した。とはいえ元朝が商税を徴税する場面は版図内に物産あるいは商品が入った場面だけである。すなわち、商税は関税であった（したがって、商税を徴税する場面は一度だけである。商税は元朝の歳入にあまり寄与していない。元朝の歳入の約8割が専売品＝塩等の売却益であった）。

カイシャンがチャガタイ・ウルスの開国を承認したのは、物流がシルクロードに依存する場面が低下していたからである。ジョチ・ウルスとの交易は、シルクロードより「草原の道」を使うほうが便利である。フレグ・ウルスとの交易は海路を使うほうが便利である。中央アジアの支配をめぐる争いは不毛な争いであり、開国を認めて仕送りを停止するほうがよい。カイシャンは連邦型の世界帝国を構築した。しかし、カイシャンに甘さがあった。

南宋制圧後、クビライは南宋が発行した会子を無効にし、中統鈔（中統元宝交鈔）を発行した。会子同様、中統鈔も専売品＝塩等と交換できたが、会子とちがい、償還期限がない。その意味で、中統鈔は手形や債券ではなく貨幣＝紙幣である。

クビライは中統鈔の無期限使用を可能にする手段として、金銀との交換を保証した。すなわち、中統鈔は金銀兌換紙幣であった。だが、同時にクビライは金銀の私的売買を禁止する。クビライが発行した紙幣＝中統鈔は、元朝の出先機関＝平準行用庫でなければ銀＝世界通貨と交換できない「地域通貨」であった。

江戸時代の徳川幕府は、日本の金山と銀山をすべて支配した。クビライが版図内の金山と銀山をすべて支配していたとしても不思議ではない。したがって、クビライが金銀の私的売買を禁止するのは当然である。だが、金銀の密貿易は容易に行える。版図内の金山と銀山をすべて支配し、物流を支配しても、外部から流入する金銀を支配するのは容易でない。そして、厄介な外部がひとつ存在する。目的を達成するには、その厄介な外部を支配しなければならない。すなわち、日本＝黄金の国（ジパング）を支配しなければならない（コラム64）。

クビライは、十分な数量の金銀を確保した後、金銀兌換紙幣＝中統鈔を発行したわけではない。とはいえ、初期の中統鈔は会子の代替手段として通用した。だが、普及すれば行き詰まる。クビライにとって、日本征服は必定であったが、二度目の日本遠征にも失敗する。その後クビライは金銀の私的売買を解禁した。テムルの代も金銀解禁が続いた。しかし、カイシャンは新紙幣＝至大銀鈔を発行し、金銀の私的売買を禁止する（若いカイシャンが、日本から流入する金銀を認識していたとは思えない。彼は、たんにクビライの政策を模倣したにすぎないと思う）。

中央アジアという「赤字部門」を切り離したカイシャンは、金銀の私的売買を再度禁止しても混乱が生じる場面はない、と判断したのかもしれない。だが、現実がカイシャンの政策を否定した。新紙幣発行後、物流が停滞してインフレが勃発する。インフレにもっとも困惑したのは紙幣で俸給＝給与を得ていた文官や武官たちであった。即位してから約3年半後の1311年、カイシャンは死去するが、おそらく暗殺である。カイシャンの死後、実弟のアユルバルワダが即位し、金銀解禁を再開した。また、銅貨＝銅銭も発行する。

（九州大学教授の佐伯弘次氏や宮崎大学教授の関周一氏等の著書もあるが、概して、日本史の専門家たちはやたら元寇に言及し、日元貿易に言及する場面がほとんどない。だが、筆者の認識では、日元貿易下で日本の荘園が変貌あるいは衰退し、村落共同体＝農村が誕生した。日本の朝廷が発行する皇朝十二銭が普及しなかったのは、商人が宋銭を信頼していたためである。モンゴル軍が南宋を滅ぼした後も、日本では宋銭が使われ続けた。他方、元朝下の中国では、宋銭が貨幣として通用しない。元朝下の中国で宋銭が「ゴミ」になり、日本に渡航する船舶が船底に積む錘になる。そして、多量の「ゴミ＝錘＝宋銭」が日本で流通する。商人が、皇朝十二銭より宋銭を信頼した場面で日本の国体＝朝廷が貨幣を発行する「力」を喪失し、多量の宋銭が流通した場面で日本の政体＝鎌倉幕府が貨幣を管理する機能を喪失した。だがカイシャンの死後、中国で銅銭＝元銭が復活し、宋銭も流通しはじめる。そして日本への宋銭流入が減少し、鎌倉幕府が窮地に陥り倭寇がはじまる。日本では、カイシャンが死去してから22年後の1333年に建武政権が誕生するが、後醍醐天皇はジャブジャブマネー下で衰退した荘園を復元することはできないし、倭寇を取り締まることもできない。村落共同体を支配する守護や地頭がその後の日本を大きく左右する。現在の日本経済と日本の周辺海域は、よく似た状況にあると思う。日銀のジャブジャブマネー政策下で一部の大企業（テレビ局や新聞社、大手広告代理店や大手百貨店等）が衰退し、新興企業（eコマースや新素材分野の企業等）が成長して日本経済を大きく左右するかもしれない。倭寇に相当する日本人の海賊行為はないが、東シナ海や黄海、日本海が何かと騒がしい。だが、宋銭の流通をテコにして中世の日本経済を語り、それをテコにして現在の日本経済を語る経済学者がいない。また、倭寇に遡行して現在の日本の周辺海域を語る社会学者もいない。余談であるが、2017年2月11日付けの中日新聞と東京新聞に「移民を入れるな」などと投稿した社会学者の上野千鶴子は、今の日本に不要な全共闘世代の残骸である、というしかない）

アユルバルワダ（仁宗）や次のシデバラ（英宗）は「大カン」と呼ぶより中華風に「皇帝」と呼ぶほうがふさわしい。アユルバルワダ即位後、ジョチ・ウルスとフレグ・ウルス、チャガタイ・ウルスは正式な使節を送ることさえしなくなる。他方、元朝は農税を徴税し、いわゆる「中華帝国」になる（カイシャンの代まで、元朝は農税を徴税していなかった）。そして1368年、朱元璋率いる大軍が大都に迫り、元朝はモンゴル高原に去る。

元朝が発行する紙幣が銀を凌駕する世界通貨になる場面はなかった。したがって、筆者は元が世界帝国であったと認識しない。それでもモンゴル帝国が世界帝国であったといえるのは、ジョチ・ウルスとフレグ・ウルスが存在したからである。世界帝国は、元ではなく、ジョチ・ウルスとフレグ・ウルスである。ただし、本章の最初の節で述べたように、封建国家の外部として存在する。

（世界帝国は、元首が「立法者」として君臨する多言語多制度空間である。キエフ大公国では大公が、パレオロゴス朝ビザンツ帝国では皇帝が「立法者」として君臨した。ジョチ・ウルスとフレグ・ウルスはキエフ大公国やビザンツ帝国の統治体制を模倣しながら世界帝国を維持したように思う。以後、慣例にしたがい、ジョチ・ウルスを「キプチャク・ハン国」、フレグ・ウルスを「イル・ハン国」、チャガタイ・ウルスを「チャガタイ・ハン国」と呼ぶ。キプチャク・ハン国の後継帝国がロシア帝国で、イル・ハン国の後継帝国がオスマン帝国およびサファヴィー朝ペルシャ、そしてキプチャク・ハン国の後継帝国がティムール帝国である）

コラム63：　高麗の名君

本文で述べたように、テムジン＝チンギス・カンの死後、彼の三男オゴディが大カンに即位し、金朝討伐と並行して高麗遠征を開始した。1231年、モンゴル軍は高麗の首都開城（ケソン）を陥落する。高麗王朝は和議を求めたが、モンゴル側の献納要求は過大であった（1万枚の毛皮、2万頭の馬、100万人分の軍服、多数の奴隷等々）。高麗王朝は朝廷を江華島に移し、朝鮮半島内の各地で遊撃戦＝ゲリラ戦を展開する。他方、モンゴル軍は朝鮮半島内の民衆を殺戮し、農地を焦土化する。モンゴル軍と高麗遊撃軍の戦闘は四半世紀以上続いた。

1258年、高麗王高宗（コジョン）が降伏し、翌1259年に死去する。高宗の死後、彼の長男元宗（ウォンジョン）が即位し、高麗は元に服属するが、筆者が注視したいのはその後の高麗である。とはいえ、江華島から開城への遷都や、三別抄（サムピョルチョ）の反乱等ではない。筆者が注視したいのは、元宗の死後、高麗王に即位した忠烈王（チュンニョルワン）の施政である。韓国でも日本でも忠烈王の評判はよくない。韓国では、洪茶丘などと同様に売国奴などと罵られたりもしている。だが、筆者には、忠烈王が暗君であったとは思えない。それどころか、名君というべき王であったと思う。

忠烈王は1259年に人質としてモンゴル帝国に送られ、1271年にクビライの娘を娶っている。当時、忠烈王は35歳で妃もいた。それでもクビライの娘を正室として迎えたわけだが、これには理由がある。忠烈王が人質としてモンゴル帝国に滞在していた頃、クビライとアリクブケの抗争が勃発した。忠烈王はアリクブケに迎合することもできた。その場合、アリクブケは高麗の独立を認めたかもしれない。だが、忠烈王はクビライの軍門に下った。

忠烈王には、クビライとアリクブケのどちらが勝つかは不明であったと思う。しかし、クビライの軍門に下ったのは正しい判断であった。なぜなら、東方三王家を束ねるタガチャルがクビライに合流したからである。忠烈王がアリクブケに迎合すれば、河北のモンゴル軍が高麗に侵攻する可能性があった。アリクブケがどのような好条件を提示したとしても、高麗の民衆を戦火から守るにはクビライの軍門に下るしかない。

忠烈王にとって、クビライの娘との結婚は高麗の民衆を救済するためであった。第1回日本遠征の直前に元宗が死去し、忠烈王が即位する。忠烈王は文官と武官に弁髪令や胡服令を発令し、高麗の元朝色を強化するが、それにより高麗は元朝への献納をおそらく逃れた。

忠烈王は、第2回日本遠征のために約900隻の船舶を建造して元に提供するが、それら船舶を無償で提供したとは考えにくい。忠烈王は、クビライから見返りを得て、それら船舶を提供したはずである。「見返り」はおそらく農産物である（四半世紀以上続いた戦乱により、朝鮮半島は荒廃し、農地が焦土化していた。当時の高麗は食料を自給できる状況にない）。

第2回日本遠征後、東方三王家の大反乱が勃発し、忠烈王下の高麗軍もクビライの軍門下で戦うが、高麗軍が鴨緑江を越える場面はなかった。忠烈王は、元朝に忠誠を示しながら高麗の復興を目指し、高麗の民衆を飢餓から救った。

コラム64： 日本＝黄金の国（ジパング）

歴史家たちは、第1回日本遠征（文永の役）で元が被った損害はわずかであり、第2回日本遠征（弘安の役）で元が被った損害もわずかであると論じている。歴史家の杉山正明氏は、第2回日本遠征は棄民政策であったとまで論じている。そして、第2回日本遠征に失敗したクビライが計画した第3回日本遠征を、「面子の問題」であったと論じている。

だが、面子のためにクビライが遠征を計画するとは考えにくい。クビライが日本征服を目指した理由はひとつしかない。日本が産出する金と銀である。筆者は、日本の金山と銀山を支配するまで、クビライは何度も日本遠征を繰り返したと思う。

北宋に渡った平安時代の僧奝然が、第2代皇帝太宗に、「東の奥州は黄金を産出し、西の対馬は白金＝銀を産出して租税とする」と上奏している。事実、当時の日本の朝廷は対馬に毎年890両の銀を太宰府に納税するよう命じていた。また、生野銀山や石見銀山でも銀の産出が行われていた（石見銀山は1309年に大内弘幸が発見したと伝えられているが、おそらく銀を採掘している場面を目撃したにすぎない）。

日宋貿易下で、日本は銀を輸出していた。したがって、金銀の私的売買を禁止して金銀兌換紙幣＝中統鈔を発行したクビライに、日本＝黄金の国（ジパング）を征服しなければならない理由があった。元朝の使節に対する鎌倉幕府の対応は、日本史の専門家や日本史マニアがしばしば指摘する「外交の無知」とはおそらく無縁である。

第2回日本遠征で大敗したクビライは金銀解禁を実施した。その後日元貿易が増大する。カイシャンは、日本が輸出する多量の金銀を見落とした。

日本は、たんに金銀を輸出しただけである。だが、それが元朝の統治体制を蝕む。そして約300年後に同様な場面が再現する。日本が輸出する多量の金銀が初期帝国主義国家＝スペインを蝕む。それについては後述する。

５．７　神聖ローマ帝国と東欧三国の外来王朝

フリードリヒ2世（在位1220～1250年）の死後、彼の次男コンラート4世がドイツ皇帝に即位するが、1254年に死去する。その後ホラント公ウィレム2世が即位するが、1256年に死去する。ドイツ帝国は「大空位時代」に突入し、皇帝の座をめぐる権力闘争が勃発した。他方、皇帝を選出する選帝侯会議も誕生する（ホラント公ウィレム2世は、ドイツ帝国の名称を「神聖ローマ帝国」に改めている。以後、ドイツ帝国を「神聖ローマ帝国」と呼ぶ）。

1260年、ボヘミア王オタカル2世（オタカル1世の孫。在位1253～1278年）がクレッセンブルンの戦いでベーラ4世率いるハンガリー軍を破る。オタカル2世はオーストリアとスロヴェニア（現在のオーストリア共和国とスロヴェニア共和国）を占領し、ボヘミア王国の版図を拡大した。そして神聖ローマ皇帝即位を目指す。だが、選帝侯会議はハプスブルク家のルドルフ1世（在位1273～1291年）を選出する。

即位後、ルドルフ1世はオタカル2世にオーストリアとスロヴェニアの返還を求めるが、オタカル2世は応じない。ルドルフ1世はウィーンを包囲してオタカル2世を追放した。オタカル2世は、オーストリアとスロヴェニアを返還し、ルドルフ1世の追放令を解いたが、その後軍を編成して奪還を試みる。だが、1278年のマルヒフェルトの戦いで敗北し、戦死する。オタカル2世の死後、彼の嫡子ヴァーツラフ2世（在位1278～1305年）がボヘミア王に即位する。ヴァーツラフ2世はルドルフ1世に臣従し、彼の娘を娶った。

他方、ポーランドで216年ぶり（クラクフ司教スタニスワフを殺害したボレスワフ2世以来）にポーランド人の国王＝プシェミスウ2世（在位1295～1296年）が即位するが、約1年後に暗殺された。プシェミスウ2世の死後、ポーランド貴族たちはボヘミア王ヴァーツラフ2世を推挙する。ヴァーツラフ2世はボヘミア王兼ポーランド王になるが、その後ハンガリーで異変が生じる。

1301年、アンドラーシュ3世（在位1290～1301年）が死去し、アールパード朝が断絶する。ハンガリー貴族たちは、ヴァーツラフ2世の次男ヴァーツラフ3世を推挙した。ヴァーツラフ3世はハンガリー王に即位するが、1305年にヴァーツラフ2世が死去したため、ボヘミア王とポーランド王も兼ねる。だが翌年、暗殺された（当時のヴァーツラフ3世の年齢は16歳である）。

ヴァーツラフ3世の死後（すなわち14世紀初頭）、ボヘミア＝チェコとポーランド、ハンガリーの王位が同時に空位になる。以下、14世紀の東欧三国およびドイツの歴史を論じる。

ボヘミアでは、1310年に当時の神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世の長男ヨハン（チェコ名ヤン）がヴァーツラフ3世の妹エリシュカを娶り国王に即位する。ボヘミアの王位がプシェミスル家からルクセンブルク家に移ったが、ヨハンがボヘミアに愛着を抱く場面はなかった。彼は人生の大半を戦場で過ごす。彼がプラハに戻るのは銀貨や兵糧が枯渇した場面だけである。したがって、エリシュカがボヘミアの執政を担うが、彼女は1330年に死去する。

その後ヨハンに同行して戦場に赴いていた彼の長男カールがボヘミアの執政を担う。他方、ヨハンは1346年のクレシーの戦いに参戦して戦死する。

（当時のヨハンは失明していたが、それでも戦場に赴いた。ヨハンは、戦争が王の仕事で、戦場が王の死に場所である、と思い込んでいたようである。だが、そんなヨハンとエリシュカの夫婦仲は良かった）

ヨハンが戦死する少し前、ローマ教皇クレメンス6世がカールをドイツ王に任じている。当時の神聖ローマ皇帝はヴィッテルスバッハ家＝バイエルン家出身のルートヴィヒ4世で、クレメンス6世はルクセンブルク家出身のカールを対立皇帝に擁立したともいえる。内乱が勃発しかねない状況が生じたが、1347年にルートヴィヒ4世が死去する。同年、カールはボヘミア王カール4世（チェコ名カレル4世）に即位した。

当時、ボヘミアのクトナー・ホラ市は銀の産地であった。カール4世は銀貨＝プラハ・グロシュ銀貨の鋳造を増大して財政を強化し、パリを模倣してプラハ市街を整備する。また、大学＝プラハ・カレル大学を創立する。

（ボヘミアでは、ヴァーツラフ2世の頃から銀貨＝プラハ・グロシュ銀貨を鋳造しはじめたが、国政に無関心であったヨハンがクトナー・ホラを重視する場面はおそらくない。したがって、プラハ・グロシュ銀貨の鋳造が増大したのはカール4世の代である。そして16世紀前半まで、プラハ・グロシュ銀貨が神聖ローマ帝国の正貨すなわち本位貨幣の役割を担う。ちなみに、プラハ・カレル大学は神聖ローマ帝国初の大学である）

1355年、カール4世（在位1355～1378年）が神聖ローマ皇帝に即位する。そして翌1356年、金印勅書を発布する。カール4世は、金印勅書で7名の選帝侯による皇帝選出を定め、他方、ローマ教皇による皇帝選定を排除し

た。それによりドイツとイタリアの支配者層が分離し、また神聖ローマ帝国内で皇帝派と教皇派が対立する場面がなくなる。

とはいえ、選帝侯会議がすでに存在していたし、また後述するアヴィニョン捕囚があったため、ローマ教皇は政治力を喪失していた。したがって、歴史家の多くが、神聖ローマ皇帝カール4世が金印勅書を発布した主目的は選帝侯からハプスブルク家とヴィッテルスバッハ家を排除することであった、と論じている。その認識は正しい（事実、ハプスブルク家とヴィッテルスバッハ家は7名の選帝侯に含まれていない）が、重視すべきことが他にある。

金印勅書で、カール4世は各選帝侯の所領内での裁判権、鉱山採掘権、関税徴税権、貨幣鋳造権、ユダヤ人の保護権を認めた。歴史家の多くが、カール4世は事実上の主権国家を承認したと論じているが、カール4世は所領内での立法権を認めていない。カール4世が承認したのは「高度な自治」と呼ぶ程度のものであるが、とはいえ金印勅書で貨幣鋳造権を認めたことは大きい。

カール4世が金印勅書を発布するまで、ヨーロッパの金貨は概ねフィレンツェが鋳造してローマ教皇が発行するフローリン金貨だけである（ハンガリーが金貨を鋳造して発行し、ヴェネツィアも金貨＝ゼッキーノを鋳造して発行していたが、流通量はフローリン金貨が圧倒している）。しかし、カール4世は金印勅書の下で選帝侯の金貨発行を認めた。金印勅書発布後、各選帝侯は独自の金貨＝グルデン金貨を鋳造して発行しはじめる。

当時のヨーロッパで金融業を営んでいたのはユダヤ人である。ユダヤ人＝金融業者たちが両替あるいは換金サービスを提供し、信用取引が増大して金貨が決済手段になる（コラム65）。

（各選帝侯が発行する金貨＝グルデン金貨は地域通貨である。銀貨が秤量貨幣化し、世界通貨になった場面で、貨幣＝財貨が中世帝国の統治制度から世界制度に変貌したが、金印勅書発布後、金貨＝地域通貨が統治制度として機能しはじめる。封建制は衰退するが、それでも金貨＝地域通貨の発行量と銀貨＝世界通貨の発行量が金銀複本位制で定める割合と概ね同じであれば、貨幣経済に混乱が生じる場面はない。だが、クトナー・ホラで採掘する以上の多量の銀が外部から流入する場面があれば、混乱が生じる。市場経済については後述するが、16世紀後半にそのような場面が勃発し、市場経済が誕生した。そしてカトリック教会が贖宥状＝免罪符を発行する）

ハンガリーでは、ベーラ4世（在位1235～1270年）の代に転機が訪れた。1241年のモヒの戦いでモンゴル軍に惨敗したベーラ4世は貴族に王領を割譲して「県」を制定し、各県の代表者による立法府も制定した。また鉱山開発を促進して貴金属と塩の産出量を増大させ、王室財政を立て直す（ハンガリーでは、イシュトヴァーン1世の頃から「県」という考えは存在したが、各県が自治権を持ち代表者が国政に参加するようになったのはベーラ4世の代からである。他方、「県」の下で各都市が城塞都市に変貌する）。

ベーラ4世の死後、彼の長男イシュトヴァーンがハンガリー王イシュトヴァーン5世（在位1270～1272年）に即位し、彼の死後、彼の長男ラースロー4世（在位1272～1290年）が10歳で即位する。成人したラースロー4世は神聖ローマ皇帝ルドルフ1世に臣従し、前述したマルヒフェルトの戦いでボヘミア王オタカル2世を破る。しかし、その後イスラーム教に改宗したキプチャク人等を招いて軍を増強し、王権を強化しようとする。そのためローマ教皇に破門され、反発する大貴族たちに暗殺された。ラースロー4世の死後、イシュトヴァーン5世の末子アンドラーシュ3世（在位1290～1301年）が即位するが、彼の死後、先で述べたヴァーツラフ3世が即位する。そして彼の死後、王位が空位になる。

だが1308年、ナポリ王国のカーロイ・ローベルトがハンガリー王カーロイ1世に即位する（彼の母親はイシュトヴァーン5世の娘マーリアである）。即位後、カーロイ1世は反発する大貴族を平定して王権を強化し、新たな金鉱を発掘して金貨の質を高め、王室財政を強固にする。他方、ボヘミアやポーランドと同盟を結び、神聖ローマ皇帝ルートヴィヒ4世やオーストリア公アルブレヒト2世と対峙した。

カーロイ1世の死後、彼の三男ラヨシュがハンガリー王ラヨシュ1世（在位1342～1382年）に即位する。ラヨシュ1世はヴェネツィアからクロアチアやダルマチアを奪還し、後述するカジミェシュ3世の死後、ポーランド王にも即位する。その後、ナポリ王国を一時占領し、バルカン半島でオスマン帝国と対峙した。彼の死後、彼の長女マーリアと結婚したカール4世の嫡子ジギスムントが神聖ローマ皇帝とボヘミア王、ハンガリー王を兼ねる。

カーロイ1世とラヨシュ1世の代に、ハンガリーは人口300万を超える大国に成長した。しかも王室財政が鉱物資源に依拠していたため、農民の負担が軽減している。南塚信吾氏の著作「ハンガリーの歴史（河出書房新社）」によれば、当時のハンガリーの農奴人口は36万～48万人ほどで、他のヨーロッパ諸国と比較して非常に少ない。また、ベーラ4世は1251年に特許状を発布してユダヤ人の入植を促進している。モヒの戦いで惨敗したベーラ4世にとって、ユダヤ人の入植は復興策であったと思うが、ユダヤ人に対するハンガリー王の寛容はその後も続く。マーチャーシュ1世（在位1458～1490年）とナポリ王女ベアトリーチェ（ハンガリー名ベアトリクス）の結婚式では、多数のユダヤ人が正装して門前に整列した。

ヴァーツラフ3世の死後、ポーランドもしばらく混乱するが、1320年にクヤヴィ公ヴワディスワフがポーランド王ヴワディスワフ1世（在位1320～1333年）に即位する。当時のポーランド領は現在の半分程度で、他方、ドイツ騎士修道会がさらなる支配地の拡大を目指していた。しかもボヘミア王ヨハンがポーランド王位を諦めていない。ヴワディスワフ1世はドイツ騎士修道会やボヘミア王ヨハンとの戦いを繰り返し、ポーランドの領土と王位を守る。

ヴワディスワフ1世の死後、彼の三男カジミェシュがポーランド王カジミェシュ3世（在位1333～1370年）に即位する。カジミェシュ3世はボヘミア王ヨハンに大金を支払い、ドイツ騎士修道会に領地を割譲して平和を維持する。他方、ウクライナ西部に侵攻して東に領土を拡張した。様々な政治上の駆け引きと軍事上の駆け引きが交差したが、結局、旧キエフ大公国のハールィチ公国領をポーランドが支配し、ヴォルィーニ公国領をリトアニアが支配する。

とはいえ、カジミェシュ3世は外征より内政に尽力した。内政上のもっとも大きな変化は控訴院の設置である。当時、ポーランドの各都市は概ねドイツ都市法＝マクデルブルク法の下で自治が行われていた。そして、マクデルブルクの地方裁判所が裁判を引き受けていた。しかし、カジミェシュ3世の代にポーランド国内で裁判が行われるようになる。また、カジミェシュ3世は農民の負担を軽減し、ユダヤ人を保護した。

カジミェシュ3世の死後、ハンガリー王ラヨシュ1世がポーランド王を兼ねる。そしてラヨシュ1世の死後、彼の末娘ヤドヴィガが10歳で即位する。即位後、ヤドヴィガはリトアニア大公ヨガイラ（ポーランド名ヤギェウォ）と結婚する。ヨガイラはキリスト教（カトリック）に改宗し、ポーランド王ヴワディスワフ2世（在位1386～1434年）に即位する。リトアニアがキリスト教国になり、ポーランドとリトアニアがひとつの国＝ポーランド・リトアニア連合王国になる。

ヤドヴィガはドイツ騎士修道会との和平に尽力し、またリトアニア人の改宗にも尽力したが、1399年の出産で体調を壊し、死去する（カジミェシュ3世がクラクフでヤギェウォ大学を創立したと伝えられているが、開校したのはヤドヴィガである）。他方、ヴワディスワフ2世は対立していたヴィータウタスにリトアニアの大公位を授け、自身はポーランドの統治と外交に専念する。そして神聖ローマ皇帝ヴァーツラフ4世を支持し、ポーランド西方の安全を確保する（コラム66）。

偶然の一致であったが、14世紀に東欧三国の王朝がすべて外来王朝になる。それら外来王朝は東欧三国の発展に寄与したが、重視すべきことが他にある。14世紀中頃、イギリスやフランスで黒死病が流行した。そのため人口が3割以上減少したと伝えられている。ドイツでも、たとえばリューベクの人口が3割以上減少した。だが、筆者が知る限り、ハンガリーやポーランドで黒死病が流行したとの記録がない。だから、ユダヤ人の入植を受け入れたともいえるが、14世紀のイギリスやフランスとハンガリーやポーランドのちがいを考察することは、現代の疫病対策に役立つかもしれない。

ちなみに、ハンガリーやポーランドの森林も10世紀～13世紀の間にかなり伐採されている。他方、都市の城塞化が進展した。歴史家の多くが、レグニツァの戦いとモヒの戦いの敗北が、ハンガリーやポーランドで都市の城塞化が進展した原因である、と考えている。そして、ドイツの都市を模倣したと論じている。だが、彼らは都市構造のちがいを調べていない。

長い歴史の過程で、コンスタンティノープルは上下水道が完備した都市に進展していた。ハンガリーやポーランドでも、コンスタンティノープルを模倣して都市が城塞化した可能性がある。筆者は、当時のハンガリーやポーランドの都市は、イギリスやフランス、ドイツの都市より公衆衛生が完備していたように思う。同じことが、ロシアの都市についてもいえるかもしれない。

コラム65：　王国と公国のちがい

ヨーロッパでは、皇帝や教皇が国王を承認し、皇帝や国王が公爵を承認する。国王が他の国王の臣下になる場合もあるが、国王が他の国王を承認する場面はない。それが、国王と公爵のちがい、あるいは王国と公国のちがいである。より大きなちがいもある。国王は金貨や銀貨を鋳造して発行できるが、公爵は発行できない。

とはいえ、皇帝＝神聖ローマ皇帝から特許状を得た公国や帝国都市が金貨や銀貨を鋳造して発行する場面があった。したがって、カール4世が発布した金印勅書は特許状の大盤振る舞いである。だが、大盤振る舞いで得をしたのは選帝侯だけである。当然、他の公爵たちは反発する。

もっとも反発したのがカール4世の娘婿オーストリア公ルドルフ4世である。彼は自身を「大公爵」と称し、隣接するチロル地方を併合する。そのためバイエルン公シュテファン2世との間に戦火が生じた。仲裁に入ったカール4世が別途特許状を発行してルドルフ4世の「大公」位を承認する。以後、オーストリア公国は「大公国」になり、後のハプスブルク帝国の基礎を築く。他方、カール4世がルドルフ4世に与えた特許状と金印勅書が先例になり、歴代神聖ローマ皇帝が様々な特許状を公布するようになる。

むろん、カール4世が発布した金印勅書の歴史的意義は他にある。金融業がヨーロッパ全域に広がり、信用取引が増大して金貨と銀貨の役割が分離した。すなわち、金貨が決済手段になり、銀貨が交換手段になる。

長い歳月をかけて、金銀複本位制が完成したといえるが、完成は終わりのはじまりでもある。次章以降で、金銀複本位制が崩壊する経緯を述べるが、物品貨幣が消滅すれば公爵や伯爵が自前の財貨を鋳造して発行したがるのは当然である。その意味で、カール4世は妥当な政策を実施した。

カール4世の代の神聖ローマ帝国は概ね平穏であった。フィレンツェから追放されて放浪していた詩人ダンテ・アリギエーリは、ヨハンに同行して戦場に赴く若きカール4世に謁見した場面で、神聖ローマ帝国を託せる人物であると直観したようである。ダンテの直観は正しかった。

コラム66： モスクワ大公国の誕生とタンネンベルクの戦い

アレクサンドル1世（アレクサンドル・ネフスキー）の死後、彼の弟ヤロスラフ3世（在位1263～1271年）がウラジーミル・スーズダリ大公に即位する。そしてヤロスラフ3世の死後、後継争いが生じた。とりわけトヴェリのグループとモスクワのグループが「大公」位を争う。1328年、ウズベク・ハン（モンケ・テムルの孫。在位1313～1342年。彼の代がジョチ・ウルスの最盛期である）がトヴェリを制圧したモスクワ公イヴァン1世（在位1328～1340年）の大公即位を承認する。そして他の公国の徴税も委ねた。

イヴァン1世はウラジーミル・スーズダリ大公国の統治を刷新し、モスクワに東方正教会の府主教座を移す（以後、ウラジーミル・スーズダリ大公国を「モスクワ大公国」と呼ぶ）。ウラジーミル・スーズダリ大公国＝モスクワ大公国は強固になったが、他方、ジョチ・ウルスが混乱に陥る。ウズベク・ハンの死後、内乱が勃発し、バトゥ家が断絶する。その後、1359～1379年までの約20年で21名の「カン」が即位する。

1373年、モスクワ大公ドミトリー4世（ドミートリー・ドンスコイ。在位1359～1389年）がジョチ・ウルスへの貢税を拒否した。そして1380年、クリコヴォの戦いでジョチ・ウルスの大軍を破る。しかし、新たなカンに即位したトクタミシュがモスクワを占領したため、ドミトリー4世は再度ジョチ・ウルスに臣従する。だが、その後トクタミシュはティムール帝国と交戦して大敗する。

トクタミシュの死後、ジョチ・ウルスはカザン・ハン国やアストラハン・ハン国、クリミア・ハン国等に分裂した。他方、モスクワ大公国はイヴァン3世の代に勢力を拡大し、イヴァン4世の代にカザン・ハン国とアストラハン・ハン国を併呑する。その後、モスクワ大公国はロシア帝国に成長し、クリミア・ハン国を併呑する。

ジョチ・ウルスが混乱に陥っていたため、当時のリトアニア東方は安泰で、リトアニアの敵対勢力はドイツ騎士修道会だけであった。そして、リトアニアでのヨガイラの地位は万全ではなかったが、ポーランドとリトアニアの利害は一致していた。ポーランド貴族たちにとって、ポーランド王はドイツ騎士修道会を支援する神聖ローマ皇帝ジギスムントよりヤギェウォ＝ヨガイラのほうが望ましい。ヤドヴィガとヨガイラの結婚は、ポーランド貴族たちが仕組んだ政略結婚であったが、ヤドヴィガは納得していたと思う。

その後、ヨガイラ＝ポーランド王ヴワディスワフ2世はポーランドに大勝利をもたらす。1410年、ポーランド北部のグルンヴァルトでポーランド・リトアニア連合軍とドイツ騎士修道会の大会戦（タンネンベルクの戦い）が勃発した。ドイツ騎士修道会は大打撃を被り、1411年にトルンの和約を締結して支配地域拡大を断念する。そして、1466年の第二次トルン和約で西プロイセンとダンツィヒ（ポーランド名グダニスク）、マリーエンブルク（ポーランド名マルボルク）をポーランドに割譲し、世俗化する。

（神聖ローマ皇帝ジギスムントが開催した史上初の国際会議＝コンスタンツ公会議は、カトリック教会の分裂＝シスマを解消し、他方、神学者ヤン・フスを火刑にしたことで有名であるが、タンネンベルクの戦いの戦後処理が会議の主題であった。ドイツ騎士修道会は、「ポーランド王ヴワディスワフ2世は異教徒であり、異教徒の武装を禁じるべきである」と論じた。また、「ポーランド王とポーランド人を抹殺すべきである」と論じる者もいた。だが、当時のポーランドはローマ教皇を宗主権者あるいは「立法者」と認める数少ない王国のひとつである。ローマ教皇マルティネス5世はドイツ騎士修道会等の陳述を却下する）

５．８　アヴィニョン捕囚

第3回十字軍遠征に従軍したフランス王フィリップ2世は、王室財政の運営をテンプル騎士修道会に一任したが、会計検査院を設置して歳入と歳出を監視し、また高等法院を設置して不正を監視した。この体制はその後も続く。

すでに述べたが、シチリア晩祷戦争下でフランス王フィリップ3世が戦病死する。フィリップ3世の死後、彼の次男フィリップ4世（在位1285～1314年）が即位し、フィリップ2世が設置した高等法院を「立法者」として君臨するためのテコにする。すなわち、フランス王フィリップ4世は高等法院を立法府化した。そして王国基本法を制定し、国王に有利な国法体系を構築する。高等法院は司法府の役割も担うが、他方、フィリップ4世は国王顧問会議＝行政会議を設置し、国王による王室財政への関与も可能にする。すなわち、フィリップ4世は事実上の行政府も設置した（フィリップ2世は、法の執行者として君臨する場面があっても、法の制定者＝立法者として君臨する場面はなかった）。

1294年、フィリップ4世は立法府と司法府、行政府を設置し、中央集権体制を構築する。そして聖職者身分への課税を決断した。フランス国内の聖職者は概ね同意したが、ローマ教皇ボニファティウス8世が反発する。ボニファティウス8世はフィリップ4世を非難し、退位を勧告した。そこで1302年、フィリップ4世は身分制議会＝三部会を開催し、フランス国内の聖職者と諸侯、平民代表の賛同を得てローマ教皇の拘束を決定する。1303年、高等法院の法律顧問ギョーム・ド・ノレガがボニファティウス8世を奇襲して監禁した（アナーニ事件）。ボニファティウス8世は、三日後に釈放されたが、その後憤死する。

ボニファティウス8世の死後、ローマ教皇に就任したベネディクトゥス11世がフィリップ4世の退位勧告を取り消す。ベネディクトゥス11世はその後死去するが、フランス出身のクレメンス5世が新たなローマ教皇に就任する。そして1308年、ローマ教皇庁を南フランスのアヴィニョンに移転する。

（歴史家たちは、これを「アヴィニョン捕囚」と呼んでいるが、クレメンス5世がローマ教皇庁をアヴィニョンに移転する前にローマ市を訪れたことは一度もない）

歴史家たちは、フィリップ4世が聖職者身分への課税を決断したのは、対イングランド戦争の戦費を捻出するためであったとか、王権を強化するためであったと論じている。その認識が正しいとしても、具体的には、金貨＝フローリン金貨を得るためである（フィリップ4世は、聖職者身分への課税を決断する前に財貨の改鋳を試みたが、失敗している。技術上の問題だけでなく、フランス国内に良質な金山や銀山がなかったことも大きい）。

フィリップ4世は、聖職者身分への課税を決断した場面で金納を命じた。だが、ローマ教皇庁にとって、フローリン金貨はシチリア晩祷戦争下で荒廃したイタリアを復興するための手段である。ボニファティウス8世が聖職者身分への課税に反発したのは当然であるが、シチリアを奪還できなかったローマ教皇庁に権威などあるはずがない。ポーランドを除けば、皇帝派と教皇派の闘争、その後のシチリア晩祷戦争の過程でローマ教皇は「立法者」としての地位を喪失していた。

（アヴィニョン捕囚は、フランスの統治体制の変遷を意味する。すなわち、文治体制から法治体制への変遷である。ちなみに、ボニファティウス8世は、「聖年祭」を開催して金集めをする程度のことしかやれなくなっていた。しかも華奢と飲酒や賭博を好む傲慢な人物であった。彼は詩人ダンテ・アリギエーリをフィレンツェから永久追放している）

フィリップ4世は、アヴィニョン捕囚と並行して、ギョーム・ド・ノレガにテンプル騎士修道会士の逮捕も命じる。テンプル騎士修道会士はドイツ騎士修道会士と同様な修道会士であったが、1140年に本部をパリに移し、金融業を営んで莫大な「財（金貨や銀貨）」を蓄えていた。すなわち、テンプル騎士修道会は事実上の銀行であり、したがってフィリップ2世は王室財政の運営を一任したわけだが、フィリップ4世は彼らが蓄えた「財」も得ようとする。

フィリップ4世は、再度三部会を開催し、テンプル騎士修道会士54名を火刑に処する。テンプル騎士修道会士はローマ教皇に直属していて、彼らが蓄えた「財」の真の所有者はローマ教皇であったが、教皇庁の所在地はアヴィニョンである。ローマ教皇クレメンス5世は傍観するしかなかった。

「立法者」になったフィリップ4世は、南フランスの王権も強化する。フランス王ルイ9世とイングランド王ヘンリー3世（ジョン王の嫡子。在位1216～1272年）が1259年に結んだパリ条約により、イングランド王国はロワール川以北の領地（ブルターニュ地方やノルマンディー地方）をすべて失った。しかし、ルイ9世はロワール川以南（アキテーヌ地方やガスコーニュ地方）でのアンジュー家＝プランタジネット家の宗主権を認めた。だが1293年、フランス高等法院がプランタジネット家からアキテーヌ地方とガスコーニュ地方を没収し、王領化する。

他方、イングランドでは、ヘンリー3世の代に第二次バロン戦争（1264～1267年）が勃発し、騎士や市民の代表が構成するパーラメント＝立法議会が制定する「国法」の下で国王が執政を行う仕組みができていた。そして、イング

ランド王エドワード1世（ヘンリー3世の嫡子。在位1272～1307年）が国王評議会＝行政府を編成して王権を強化し、アキテーヌ地方とガスコーニュ地方の奪還を目指す。
　1294年、南フランスの領有権をめぐる戦争＝ギエンヌ戦争が勃発した。エドワード1世はフランスに侵攻するが、イングランドの諸侯たちが反発する。しかも、ウェールズとスコットランドで反乱が勃発した。エドワード1世はアキテーヌ地方とガスコーニュ地方の奪還を断念し、フランスと和約する。そして、フィリップ4世に臣従し、彼の妹マルグリットと婚約する。さらに彼の五男エドワードがフィリップ4世の次女イザベルと婚約する。この政略結婚は、フランスとイングランドの関係を改善するように見えたが、「英仏百年戦争」の原因のひとつになる（コラム67）。
　1307年、エドワード1世は大軍を率いてスコットランド侵攻するが、行軍中に病死する。エドワード1世の死後、彼の五男エドワードがイングランド王エドワード2世（在位1307～1327年）に即位する。エドワード2世の治世下で、立法議会が強固になる。しかし、エドワード2世は寵臣政治を行う。立法議会が反発し、エドワード2世は退位する。その後、彼の長男エドワードが14歳でイングランド王エドワード3世（在位1327～1377年）に即位する。

（エドワード2世の退位は事実上の廃位であった。立法議会が国王を事実上廃位したこの事例が、後のイングランドの国政に影響を及ぼす。すなわち、ピューリタン革命を「可能な革命」にする。余談であるが、エドワード2世の退位＝廃位に彼の妃イザベルが加担している。エドワード2世廃位後、イザベルは愛人のモーティマと国政を牛耳る。だが、1330年にエドワード3世がモーティマを逮捕して処刑する。イザベルは隠遁した）

　ところで、イサウリア朝ビザンツ皇帝がイコノクラスム（聖像破壊運動）を支持し、ローマ教会総司教がそれに反発した場面からカトリック教会の歴史がはじまるが、とはいえカトリック教会が「力」を得たのは、フランク王国の王統がメロヴィング朝からカロリング朝に変遷した後である。歴史家の多くが、ピピン3世の寄進がカトリック教会を強固にした、と論じている。
　だが、筆者は、カール1世の死後、ローマ教皇庁が金貨を発行したことのほうが大きい、と考える。すでに述べたが、ローマ教皇庁が金貨を発行するまで、ヨーロッパで金貨を発行していたのはローマ皇帝＝ビザンツ皇帝だけである。ローマ教皇庁が金貨を発行した後、ローマ教皇とビザンツ皇帝の地位が対等になり、ローマ教皇がドイツ皇帝＝神聖ローマ皇帝以上に帝王化する場面が生じる。
　だが、14世紀にフランスとイングランドで「立法府」が誕生し、神聖ローマ皇帝カール4世が金印勅書を発布してローマ教皇庁の金貨発行独占を打破する。カトリック教会は「力」を失い、他方、ローマ教皇が権威化する。

（社会学者の大澤真幸氏は、著書「日本史のなぞ（朝日新聞出版）」で、「宗教的な権威（ローマ教皇）と世俗的な政治的権威（神聖ローマ皇帝）との間の顕著な二元性はヨーロッパ中世の他に類を見ない特徴である」と論じている。だが、そのような特徴は、11世紀初頭にオットー3世が死去し、その後ドイツの皇統がザクセン朝からザーリアー朝に変遷した後、約100～150年続いた「特徴」にすぎない。すなわち、ヨーロッパ中世全般の特徴ではない。むしろ、そのような特徴が生じる前の時代、すなわち、後にドイツの農民たちが「古き良き法の時代」と呼んだ9世紀末～11世紀初頭の「大開墾」のほうがヨーロッパ中世を考察する上で重要である。大澤氏は、「11世紀末に、イタリア北部ピサの図書館でユスティニアヌス法典が発見されたのだ。この出来事は、軍隊の動員ということをはるかに超えた意義、法の支配の全般を基礎づける運動の起点としての意義を担うことになった」と論じてもいる。だが、筆者の認識では、大澤氏が著書「日本史のなぞ」で論じる「解釈者革命」は、ビザンツ皇帝がバシリカ法を制定してユスティニアヌス法を卑俗法化したときからはじまる。ビザンツ皇帝とローマ教皇の対等性を重視するカトリック教会が、おそらくブルガリアからユスティニアヌス法を「輸入」し、バシリカ法以前のビザンツ帝国の統治体制、すなわち文治体制を模倣した。そして12世紀に教会法を制定し、「模倣」を強化する。だが、神聖ローマ皇帝カール4世が金印勅書を発布した後、ローマ教皇は「力」を喪失する。ローマ教皇が権威化したのは「力」を喪失した後である。ちなみに、大澤氏の著書「日本史のなぞ」は一読の価値がある。その一部を抜粋して大澤氏の言説を批判するようなことはしたくなかった。だが、金印勅書発布以前の西ヨーロッパでは、ローマ教皇が唯一の金貨発行者であるとの認識は、重要である。ローマ教皇の「力」の源泉は金貨の発行であり、権威などではない。大澤氏は、中世ギリシャ＝ビザンツ帝国を見ていないし、中世ギリシャと中世イタリアを比較してもいない）

　フランス王フィリップ4世が高等法院を強化して国王顧問会議を設置した目的は、金貨＝財貨の発行と徴税権の獲得である。それが立法府と司法府、行政府を設置につながり、統治体制の法治体制化につながる。
　「広義の近代」の出現期に、西ヨーロッパで誕生した国家のほとんどすべてが法治国家である。とはいえ、国法を厳格に運用するだけの国家は主権国家ではない。外交権や交戦権を含む「主権（国法を無制限に制定して執行する権利）」の思想が誕生するのは「広義の近代」の突破期である。
　設計主義が法治主義に先行する。すなわち、「法治」は「設計」を具現する手段であり、国家の統治者は「立法者」である前に「設計者」である。そして、設計主義の下で国法を制定し、国法を更新し続ける国家が主権国家である。「広義の近代」の出現期後半にイングランド＝イギリスが準主権国家として人類史に登場するが、約100年続いたルネサンス運動の影響が大きい。あるいは、ルネサンス運動の下で広まったプラトン思想の影響が大きい。次章で、ルネサンス運動について述べる（コラム68）。

コラム67： スコットランド王国とスコットランド独立戦争

9世紀中頃に即位したケネス1世が最初のスコットランド王であるが、スコットランド全土を統一したのはウィリアム1世（在位1165～1214年）である。ウィリアム1世はスコットランドのカトリック教会をカンタベリー大司教から独立させ、ノーサンバーランド地方の支配をめぐってイングランド王ヘンリー2世と争う。ヘンリー2世の死後、リチャード1世がスコットランドの独立を認めた。ウィリアム1世は、1万マルクの軍資金を渡し、ノーサンバーランド地方の売却も要求したが、リチャード1世は拒否する。リチャード1世の死後、ウィリアム1世は後を継いだジョンからノーサンバーランド地方を買い取ろうとする。ジョンは売却するつもりでいたが、買い取る前にウィリアム1世が死去する。

ウィリアム1世の死後、後を継いだアレグザンダー2世とアレグザンダー3世はイングランドとの争いを避けた。当時、スコットランド西岸のヘブリディーズ諸島とアイリッシュ海のマン島はノルウェー領であった。ノルウェー（あるいはデンマーク）との領有権争いを抱えていたため、アレグザンダー2世もアレグザンダー3世もイングランドと争う余裕がなかったのである。彼らの代に、ヘブリディーズ諸島とマン島がスコットランド領になる。

1286年、スコットランド王アレグザンダー3世が落馬事故で死去する。アレグザンダー3世には嫡子がいなかった。スコットランド諸侯たちは、ジョン・ベイリャルを王位継承者に指名し、イングランド王エドワード1世が承認する。そして1292年、ジョン・ベイリャルがスコットランド王に即位する。その後彼の即位を承認したエドワード1世がフランスへの出兵を要求するが、ベイリャルは要求を拒否し、フランス王フィリップ4世と同盟を結ぶ。そして1296年、イングランド北部に侵攻した。だが、エドワード1世下のイングランド軍に大敗して降伏する。ジョン・ベイリャルはロンドン塔に幽閉された。

1297年のスターリング・ブリッジの戦いでウィリアム・ウォレス率いるスコットランド軍がイングランド軍を撃退したが、翌1298年のフォルカークの戦いで大敗する（このとき、ウェールズが派兵した長弓部隊＝ロングボウ部隊が活躍している。その後ロングボウ部隊はイングランド軍の主力部隊になり、英仏百年戦争で活躍する）。ウィリアム・ウォレスはスコットランド各地でゲリラ戦を展開するが、1305年に捕えられ、八つ裂きの刑に処せられた。

しかしスコットランドの反乱は続く。1306年、ロバート・ブルースが戴冠を強行してスコットランド王ロバート1世に即位する。激怒したエドワード1世が大軍を率いてスコットランドに侵攻するが、本文で述べたように、行軍中に死去する。エドワード1世の死後、イングランド王に即位したエドワード2世はロンドンに帰還した。その後、ロバート1世は各地でイングランド軍を撃退する。1314年、エドワード2世は大軍を率いてスコットランドに侵攻するが、バノックバーンの戦いで大敗する（ちなみにスコットランド軍の勝因はゲリラ戦である。同時代の中国＝南宋でも文天祥が遊撃戦＝ゲリラ戦を展開して元朝と戦っている。「広義の近代」の出現期に、戦争の形態も変化した）。

ロバート1世は、アレグザンダー3世治世下のスコットランド領を回復した。そして1320年、スコットランドが独立国であることを宣言（アーブロース宣言）してローマ教皇の承認を得、1328年にイングランドと和約し、翌1329年に死去する。

コラム68： プラトンの思想の改ざん

文治主義はかなり古い。古代アテネの哲学者プラトンが著書「国家」で語った思想は文治主義である。プラトンは、最高のイデア＝善のイデアが支配する文治体制を理想としていた、ということもできる。

アレクサンドロス3世が構築した古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国が、ギリシャ全域とオリエント各地に古代ギリシャ哲学を広め、文治主義の下地をつくった。その後帝政下の古代ローマとアルサケス朝ペルシャが慣習法を蓄積する（十二表法はその典型である）。そして4世紀後半、ビザンツ帝国とサーサーン朝ペルシャが国教＝最高法規の下で慣習法を束ね、文治体制を構築する。「広義の近代」の出現期から、西ヨーロッパの統治体制が法治体制に移行しはじめるが、それを支えたのもプラトンの思想である。何故、プラトンの思想が治体制を支える思想から法治体制を支える思想になってしまったのか。

中世ヨーロッパでアリストテレスの思想が広まったが、プラトンの思想が広まるのはルネサンス運動以降である（すなわちアリストテレスが先でプラトンが後である）。私見あるが、ルネサンス運動下で、あるいはパレオロゴス朝ビザンツ帝国でプラトンの思想が改ざんされた。プラトンは「国家」で文治体制を理想としたが、その後「第七書簡」で法治体制を主張している。このプラトンの思想の矛盾について、哲学者の岡部勉氏は、著書「プラトンの「国家」を読み解く（勁草書房）」で、「第七書簡」は偽書である、と断言している。筆者は、岡部氏の断言は正しいと考える。何者かが、統治体制が文治体制から法治体制に移行する場面で、プラトンの思想を改ざんして利用した。

５．９　英仏百年戦争の勃発

歴史家たちは、1337～1453年までの間、イングランド王とフランス王、そしてブルゴーニュ公が戦火を交えた戦いを「英仏百年戦争」と呼んでいる。英仏百年戦争の結果、イングランドはカレーを除くフランス領地をすべて失うが、初期の戦闘（1337年から約30年の間にフランス各地で生じた戦闘）では、イングランド軍が圧勝している。とりわけ1340年のスロイスの海戦、1346年のクレシーの戦いと1356年のポワティエの戦いで圧勝している（また、1364年のオーレの戦いでもイングランド軍が圧勝している。ちなみに、ボエミア王ヨハンがクレシーの戦いに参戦して戦死したことはすでに述べたが、ヨハンはフランス軍に従軍していた）。

本節では、1339年にイングランド王エドワード3世が大軍を率いてアントウェルペン（英語名アントワープ）に上陸し、1399年にイングランド王家がランカスター家に移るまでの英仏百年戦争前半を論じる。英仏百年戦争前半は、フランス各地の戦闘でイングランド軍が圧勝したが、全面戦争に進展する場面はなかった。

1314年、フランス王フィリップ4世が死去する。フィリップ4世の死後、彼の長男ルイ10世が即位するが、約2年後に死去する。その後次男のフィリップ5世や三男のシャルル4世も即位するが、短い在位期間で死去する。フィリップ4世の息子が全員死去したため、傍流のヴァロワ伯フィリップがフランス王フィリップ6世（在位1328～1350年）に即位する。フランス王家がカペー家からヴァロワ家に移るが、他方、イングランド王エドワード3世が自身のフランス王位継承を主張する（エドワード3世の母親は、フィリップ4世の娘イザベラであった）。

とはいえ、フィリップ6世が即位した場面で、エドワード3世もフランス王に即位するつもりでいたとは思えない。12世紀初頭のイングランドの人口は約200万であったが、13世紀末頃に400～500万に増大している。他方、領内の開墾がほぼ完了していて、食料需要を満たすには新たな領地を獲得する必要があった。したがって、当時のエドワード3世が直面していた現実問題は、アーブロース宣言下で独立したスコットランドの再領有である（当時のスコットランドの人口は約40万で、スコットランド南部に開墾可能な土地が残っていた）。

1329年、スコットランド王ロバート1世が死去し、彼の嫡子デイヴィッド2世が後を継ぐが、年齢は5歳である。エドワード3世の支援を得たジョン・ベイリャルの長男エドワード・ベイリャルがスコットランド王位を簒奪する。即位後、ベイリャルはスコットランド南部をイングランドに割譲した。反乱が勃発し、ベイリャルはイングランドに逃れる。そしてデイヴィッド2世が復位するが、エドワード3世下のイングランド軍が反乱を鎮圧し、デイヴィッド2世はフランスに亡命する。

その後デイヴィッド2世の甥ロバート・ステュアートがスコットランドを統治する。すなわち、1334年から、ステュアート家のスコットランド統治がはじまった。だが、ロバート・ステュアートがスコットランド王に即位するのはデイヴィッド2世が死去した1371年である（ベイリャルは1364年に死去している。ベイリャルもデイヴィッド2世も嫡子を残さなかった。消去法的にロバート・ステュアートが即位したわけだが、1371年はステュアート朝の初年になる）。

おそらく、スコットランドの反乱を支援した報復であったと思う。1333年、エドワード3世はフランドル地方（フランス名フランダース。概ねベルギーのスヘルデ川以西から北フランス東部カレーまでの地域）への羊毛輸出を禁止した。そして、スコットランドの反乱が一応収まった1339年、大軍を率いてアントウェルペン（英語名アントワープ。ベルギー第二の都市）に上陸する。

イングランドから羊毛を輸入して毛織物を生産し、バルト海沿に輸出して生計を得ていたフランドル地方の商工業者たちはエドワード3世の羊毛禁輸に困窮していた。彼らは、侵略者エドワード3世を「フランス王」に推挙し、エドワード3世は羊毛輸出を解禁する（ちなみに、イングランドはフランドル地方への羊毛輸出を禁止してもフィレンツェに輸出できた。しかも、エドワード3世は多額の借金を抱えていて、主な貸し手はフィレンツェ商人であった）。

1340年、エドワード3世はガン（ベルギーのヘント市）でフランス王に即位する。同年、スロイスの海戦が勃発し、フランス艦隊が壊滅した（戦力はフランス艦隊が優勢であったが、海戦中にフランドル艦隊がイングランド艦隊に合流したことが、勝敗の趨勢を決定したようである。以後、イングランドがドーバー海峡の制海権を握る）。

スロイスの海戦後、エドワード3世は帰国して王権を強化し、その後イングランド軍が北フランス西部に上陸してノルマンディー地方を一部占領する。そして1346年、クレシーの戦いでフランス軍に大勝した。クレシーの戦いの勝因は、エドワード3世の長男エドワード黒太子率いるロングボウ部隊の活躍であったが、フランス軍が無謀な突撃を繰り返したことも大きい。その後黒死病が流行したため、初期英仏百年戦争は一時休戦状態になる（1347年に神聖ローマ皇帝ルートヴィヒ4世が死去したことも、エドワード3世が戦闘を控えた理由であったと思う。だが、新たに神聖ローマ皇帝に即位したカール4世は内政を優先し、対外戦争を控えた）。

1350年、フィリップ6世が死去し、彼の長男ジャンがフランス王ジャン2世に即位する。当然、エドワード3世はジャン2世の即位を認めない。1351年、戦争が再開した。そして、1356年のポワティエの戦いでフランス軍が大敗し、イングランド軍がジャン2世を捕縛する。

ジャン2世捕縛後、彼の次男シャルルがフランスの執政を担うが、1358年にジャックリーの乱が勃発し、ナバラ王

カルロス2世とパリ市長エティエンヌ・マルセルが反旗を翻す。シャルルはそれら反乱を鎮圧した。

（ジャックリーの乱は農民の反乱であったといわれているが、純粋な農民一揆であったとは考えにくい。反乱が勃発した主な地域がフランドル地方に隣接するピカルディ、北フランス西部のノルマンディーやブルターニュといった地域である。すなわち、イングランドの息がかかっていた地域である）

1359年、エドワード3世は大軍を率いてドーバー海峡を横断し、カレーに上陸する。ロングボウ部隊の攻撃に懲りたフランス軍は後退戦術で応戦した。後退戦術が功を奏し、エドワード3世の侵攻は頓挫する（後退戦術は、撤退戦術ではない。ロングボウの長所は連射できる点にある。単射になるが、クロスボウの射程距離はロングボウより長い。後退戦術はクロスボウの射程距離を活用するロングレンジ戦法である）。

1360年、イングランドとフランスはブレティニ・カレー条約を締結する。ブレティニ・カレー条約の下で、ジャン2世を釈放する身代金の額、北フランス東部のカレー市とピカルディ地方、および南フランス西部のアキテーヌ地方とガスコーニュ（アルマニャック）地方の割譲が決まった。他方、エドワード3世はフランスの王位を放棄する。

とはいえ、ブレティニ・カレー条約を締結したのはイングランド王とフランス王ではなかった。エドワード3世の長男エドワード黒太子とジャン2世の次男シャルルである。エドワード3世は、かつてアンジュー家＝プランタジネット家がフランス領内で保有していたノルマンディー地方とブルターニュ地方の割譲も望んでいたかもしれない。だが、エドワード黒太子は要求しなかった。彼は、ノルマンディー地方やブルターニュ地方よりイベリア半島を望んでいた。ブレティニ・カレー条約締結後、エドワード黒太子はアキテーヌとガスコーニュが接するボルドーに「宮廷」をつくり、南フランス西部を統治する。そして1367年、カスティーリャ王国に侵攻する。

このとき、エドワード黒太子は炉税（家庭の暖炉や竈にかける税。事実上の人頭税）を制定して徴税する。アキテーヌの諸侯たちは同意したが、ガスコーニュの諸侯たちは同意しない。ガスコーニュの領主＝アルマニャック伯ジャンがフランス王シャルル5世（1364年にジャン2世が死去し、次男シャルルがフランス王シャルル5世に即位していた）に直訴し、「ブレティニ・カレー条約は臣民の同意を得て締結した条約ではない、自身は今もフランス王の臣下であり、シャルル5世の家臣である」と述べ、エドワード黒太子に炉税廃止を命じてほしいと懇願した。

1368年の時点で、上訴したのはアルマニャック伯ジャンだけであった。だが、1369年の時点で上訴数が1000近くになる。シャルル5世はエドワード黒太子を召喚した。しかし、エドワード黒太子は召喚に応じない。結局、シャルル5世がエドワード黒太子の所領を没収すると宣言し、戦争が再開した。

シャルル5世の下で、ベルトラン・ドュ・ゲクランがフランス軍を率いる。後退戦術＝ロングレンジ戦法が再度功を奏した。しかも、1372年にカスティーリャ王エンリケ2世率いるカスティーリャ艦隊がイングランド艦隊を襲撃する。イングランド艦隊は壊滅した（カスティーリャ艦隊の襲撃は、エドワード黒太子の侵攻に対する報復であった）。

1375年、制海権を喪失したイングランドはフランスと2年間の休戦協定を結ぶ。翌1376年にエドワード黒太子が死去し、1377年にエドワード3世が死去する（そして1380年にフランス王シャルル5世が死去する）。

エドワード3世の死後、エドワード黒太子の次男リチャードがイングランド王リチャード2世に即位するが、年齢は10歳である。そこで、ランカスター公ジョン（エドワード3世の四男）がイングランドの執政を担う。

当時のイングランドでは、エドワード1世の代のパーラメント＝立法議会と国王評議会＝行政府がひとつの議会になっていた。そして、パーラメント側の主な代表者たちがコモンズ＝庶民院を構成し、国王評議会側の主な代表者たちが貴族院を構成していた。他方、黒死病の流行が原因で農村人口が減少し、納税も減少していた。戦争で逼迫した財政を立て直すため、ランカスター公ジョンが人頭税を制定する。1381年、人頭税に反対する民衆が蜂起したが、ロンドン市長ウィリアム・ウォルワースが民衆の蜂起（ワット・タイラーの乱）を鎮圧する（コラム69）。

1385年、アルジュバロータの戦いでポルトガル王ジョアン1世率いるポルトガル軍がカスティーリャ王フアン1世率いるカスティーリャ軍を撃破する。その後、イングランドはポルトガルとウィンザー条約を結び、ランカスター公ジョンがカスティーリャ遠征の途に出る。

（アルジュバロータの戦いは、寡兵が大軍を誘導撃破した戦いであった。戦後、ランカスター公ジョンの娘フィリパがジョアン1世の后になる。政略結婚であったが、ジョアン1世とフィリパの夫婦関係は円満であった。そして、彼らの息子たちが大航海時代の幕を開く）

他方、リチャード2世は寵臣政治に邁進する。コモンズ＝庶民院が反発し、国王評議会が再生した。ただし、向きがエドワード3世の代の国王評議会の向きと逆である。リチャード2世と国王評議会の宮廷闘争がはじまったが、ランカスター公ジョンが帰国して一応収まる。そして1388年、フランスと3年間の休戦協定を結ぶ。さらに1389年、休戦期間を実質25年延長した（レウリンゲン休戦協定）。

リチャード2世が寵臣政治に邁進したのは、フランスとの戦争を終結させるためであったのかもしれない。1394年、リチャード2世の后アンが死去する。そして1397年、リチャード2世はフランス王シャルル6世の娘イザベラと再婚する。

（1380年にシャルル5世が死去した後、彼の嫡子シャルルがフランス王シャルル6世に即位するが、当時の彼の年齢は11歳である。したがって、イザベラは幼い。リチャード2世と結婚した当時の彼女の年齢は7歳である）

その後1399年にランカスター公ジョンが死去し、リチャード2世が王権を強化する。内乱が勃発し、ランカスター公ジョンの長男ヘンリーがリチャード2世をロンドン塔に幽閉してイングランド王ヘンリー4世に即位する。そして1400年、リチャード2世が餓死する（コラム70）。

コラム69： ワット・タイラーの乱

ジャックリーの乱が純粋な農民一揆であったとはいえないし、民衆の反乱であったともいえない。しかし、ワット・タイラーの乱は一揆であり、民衆の反乱であった。反乱の指導者ワット・タイラーがリチャード2世と交渉している最中にロンドン市長ウィリアム・ウォルワースが彼を斬りつけ殺害した。ワット・タイラーの死後、反乱は沈静化する。

反乱の主目的が人頭税廃止であったため、ワット・タイラーの乱には商工業者たちも参加した。首謀者たちはリチャード2世から何らかの言質を得たと思う（ワット・タイラーと交渉する前に、リチャード2世は他のリーダーたちと交渉している）。

その後、リチャード2世はフランスとの休戦協定締結に尽力した。リチャード2世が休戦協定締結に尽力した理由は、民衆の負担を軽減して反乱の再発を防止するためである。したがって、ワット・タイラーの乱は一応の成果を獲得した民衆の乱であったといわなければならない。

思想面で反乱を指導したのはジョン・ボール神父である。彼が語った「アダムが耕しイヴが紡いだとき、誰がジェントリ＝地主だったのか」という言葉は有名である。反乱鎮圧後、ジョン・ボール神父は捕らえられて八つ裂きの刑に処せられた。

ジョン・ボール神父は、神学者ジョン・ウィクリフを信奉していた。ジョン・ウィクリフの思想はボヘミアの神学者ヤン・フスに影響を与え、後の宗教改革にも影響を与えたが、重要なことは、彼が聖書を英訳したことである。当時のカトリック教会は、聖書の翻訳を禁止していた。だが、東方正教会では、聖書を様々な言語に翻訳して読むことは、ごく普通の行為になっていた。リチャード2世の最初の后アン（神聖ローマ皇帝カール4世の長女）が、東方正教会がチェコ語あるいはギリシャ語に翻訳した聖書を持っていたことが、聖書を英訳する動機になったといわれている。ジョン・ウィクリフは、バシリカ法や古代ギリシャ哲学にも高い関心を抱いていた。そして、オクスフォード大学は、学問の自由を盾にして、ジョン・ウィクリフと彼の賛同者たちを保護した。

コラム70： 反ウィクリフ派（反ロラード派）法

1401年にヘンリー4世が制定した反ウィクリフ派法は、聖書の英訳や英訳した聖書を読むこと、またジョン・ウィクリフの著作を読むことを禁じ、違反した者を火刑に処する法である。にもかかわらず、英訳した聖書を読んだ人は多かったようである。彼らは「ロラード派」と呼ばれ、約100年、地下活動を続けた。とはいえ、ヘンリー4世の代にジョン・バドビー、ヘンリー5世の代にジョン・オールドカースルが処刑されている。

重視すべきことは、国家の統治体制が文治体制から法治体制に移行しつつある過程で、「力」を喪失したカトリック教会が動揺していたことである。「力」を喪失したカトリック教会は、「権威」を得るために、権力＝王権に迎合した。反ウィクリフ派法は、その典型である。

５．１０　オスマン帝国の誕生

１３０８年、ルーム・セルジューク朝が断絶する。他方、イル・ハン国で名君ガザンとオルジェイトゥが相次いで死去する。オルジェイトゥの死後、カンに即位したアブー・サイード（在位１３１６～１３３５年）は凡庸であった。そのため小アジア各地で軍閥が跋扈する（コラム４７）。

当初、オスマン家もそれら軍閥（ガーズィー）のひとつにすぎなかったが、支配地域がビザンツ領に隣接していた。そして、シチリア晩祷戦争下で存亡の危機に陥ったビザンツ帝国は、小アジア領を事実上放棄していた。オスマン家の首長オスマン・ベイは、軍略と政略を駆使し、ビザンツ領を侵食してオスマン家の支配地域を広げる。

（オスマン家はムスリム系軍閥であったが、オスマン・ベイの盟友はギリシャ正教徒系軍閥（アクリタ）の長キョセ・ミハルである。オスマン・ベイとキョセ・ミハルの友情が語り継がれ、それが後のオスマン帝国の寛容さを支えたのかもしれない）

１３２６年、オスマン・ベイが死去する。オスマン・ベイの死後、彼の嫡子オルハンが後を継ぐ。オルハン率いるオスマン軍がマルマラ海沿岸の小アジア都市ブルサを陥落して支配した。その後、オスマン軍はニカイア（現在のトルコ共和国イズニク市）やニコメディア（現在のトルコ共和国イズミット市）等の小アジア都市も陥落して支配する。

オルハンは宰相制度を確立し、外部（イル・ハン国等）からイスラーム法学者を招いて民政を委ねた。他方、独自の銀貨＝アクチェ銀貨を鋳造して発行し、ニカイアで大学＝マドラサを開校する（ちなみにイブン・バットゥータがオルハンに面会している）。

当時、ビザンツ帝国ではヨハネス5世とヨハネス6世が帝位を争い、しかもセルビアとブルガリアがヨハネス5世と同盟を結んでビザンツ版図内に侵攻していた。ヨハネス6世はオルハンに援軍を要請する。１３３７年、オルハンの長男スレイマン率いるオスマン軍がダーダネルス海峡を越えてバルカン半島に進軍し、セルビア・ブルガリ連合軍を撃退する。そしてカリポリス（現在のゲリボル市）に拠点を築く。しかし１３５７年、スレイマンは落馬事故で死去する。そして１３６２年、オルハンも死去する。

オルハンの死後、彼の嫡子ムラトが後を継ぐ。ビザンツ帝国では１３５４年にヨハネス6世は蟄居し、ヨハネス5世が即位していた。ムラトにとって、ヨハネス6世は義父である（ヨハネス6世の娘テオドラがオルハンの後妻になっていた）。ムラトにビザンツ帝国との戦争を躊躇う理由はない。１３６３年、オスマン軍がアドリアノープル（現在のトルコ共和国エディルネ市）を占領する。さらにフィリッポポリス（現在のブルガリア共和国プロヴディフ市）やセレス（現在のギリシャ共和国セレス市）を占領し、トラキア地方を支配した。ビザンツ帝国はコンスタンティノープルとその周辺を支配する「小さな島」になる。

ムラトは常備歩兵軍団（イェニチェリ）を編成し、随時進軍可能な体制を築いた。他方、宰相のチャンダルル・カラ・ハリルに軍事権を与え、多方面への進軍も可能な体制も築いた。ムラトは小アジアの版図を拡大し、ブルガリアを併合してバルカン半島の版図も拡大する。そして１３８７年、テッサロニキを陥落して支配した。その後、ビザンツ皇帝マヌエル2世がムラトに臣従する。

１３８９年、ムラト率いるオスマン軍とセルビア・ボスニア連合軍の戦闘が勃発した（コソボの戦い）。戦闘はオスマン軍の大勝であったが、謁見の場でセルビア貴族ミロシュ・オビリッチがムラトを刺殺する。急遽、ムラトの嫡子バヤズィトが後を継ぐ。バヤズィトは、戦場にいた兄弟を全員殺害し、セルビアと和約した。そして小アジアに戻り、反乱を鎮圧する。

ムラトの死後、ビザンツ皇帝マヌエル2世が離反した。バヤズィトはコンスタンティノープルを包囲する。１３９６年、ハンガリー王ジギスムント（神聖ローマ帝国皇帝カール4世の長男）率いるヨーロッパ諸国の連合軍がバルカン半島に進軍し、ニコポリスでバヤズィト率いるオスマン軍と激突した（ニコポリスの戦い）。ヨーロッパ諸国連合軍＝ニコポリス十字軍は大敗する。その後、バヤズィトはペロポネソス半島を概ね占領し、カイロ在住のカリフからスルターンの称号を得て「バヤズィト１世」に即位する。以後、オスマン家の王朝を「オスマン帝国」と呼ぶ（コラム４８）。

ニコポリスの戦い後も、バヤズィト＝バヤズィト１世はコンスタンティノープルを包囲し続けた。だがコンスタンティノープルは陥落しない。他方、小アジアの軍閥＝諸侯が反旗を翻す。バヤズィト１世は小アジアに戻り、諸侯を平定する。１３９８年、オスマン軍がコンヤを陥落し、オスマン帝国は小アジアを概ね支配した。

オスマン帝国に滅ぼされた小アジアの諸侯たちは東のティムール帝国を頼る。１４０２年、ティムール率いる大軍がオスマン帝国に侵攻し、アンカラでバヤズィト１世率いるオスマン軍と激突した（アンカラの戦い）。オスマン軍は大敗し、バヤズィト１世は捕縛され、その後死去する。アンカラの戦い後、オスマン帝国は衰退して分裂するが、バヤズィト１世の次男メフメト１世が再興する。そしてメフメト2世の代に最盛期を迎える。

（アンカラの戦いでオスマン軍が大敗した原因は、おそらく兵員数の差である。小アジアの諸侯たちが合流し、ティム

ール軍は大軍に膨らんでいた。しかも、ニコポリス十字軍とちがい、ティムール軍に騎士道精神などない。オスマン軍の常備歩兵軍団＝イェニチェリは壊滅状態に陥った。だが、モンゴル帝国の再興を目指すティムールにとって、アンカラの戦いは余計な戦いであった。小アジア諸侯たちに領地を分配した後、ティムールは帰国して東征する。だが東征中に死去した）

コラム71： イランの国教

ガザンはイスラーム教に改宗し、ラシードゥッディーンに「集史（モンゴル史）」の編纂を命じている。またオルジェイトゥはシーア派に改宗している（ガザンもシーア派への改宗を望んでいたようである）。

ガザンとオルジェイトゥの代のイル・ハン国で、13世紀末頃にスーフィー修道僧（ダルヴィーシュ）のサフィー・アッディーンがサファヴィー教団を創立し、16世紀初頭にサファヴィー教団の長イスマーイール1世がサファヴィー朝ペルシャを開国する。サフィー・アッディーンはスンナ派に属していた。彼がシーア派十二イマーム派に改宗したか否かはわからないが、サファヴィー朝ペルシャの国教はシーア派十二イマーム派である。

サファヴィー朝ペルシャはアッバース1世（在位1588～1629年）の代に最盛期を迎える。それについては後述するが、現在のイラン・イスラーム共和国の国教もシーア派十二イマーム派である。おそらく、ガザンとオルジェイトゥの代のイル・ハン国でシーア派十二イマーム派の信徒が増大した。

コラム72： バヤズィトの兄弟殺しとスルターン即位

コラム37で、アッバース朝カリフ＝ムスタアスィムの叔父がダマスカスに逃れ、それを知ったキト・ブカ率いるモンゴル軍がダマスカスを陥落したと述べた。そしてバイバルス率いるマムルーク朝ムスリム軍がモンゴル軍を殲滅したと述べた。その後、バイバルスはアッバース朝カリフの叔父＝ムスタンスィル2世をカイロで庇護する。カイロ・アッバース朝カリフは、1517年にムタワッキル3世が死去するまで続く。

バヤズィトにスルターンの称号を授けたのはカイロ・アッバース朝カリフである。歴史家たちは、ムラトもスルターンを自称していたことを根拠に、カイロ・アッバース朝カリフがバヤズィトにスルターンの称号を授けたことをあまり重視していない。だが、筆者は大きな意味があったと考える。

バヤズィトは兄弟を全員殺害してムラトの後を継いだ。兄弟を殺害したバヤズィトが臣下を束ねる上で、おそらくカルフの許しが必要であった（人望は、弟のヤクブのほうが高かったようである）。

バヤズィトの兄弟殺しは、セルビアと和約するためであったと思う。おそらく、彼の兄弟たちは和約に反対した。だが、バヤズィトは至急小アジアに戻り、反乱を鎮圧しなければならなかった。彼は反対者たちを殺害するしかなかった（ちなみに、バヤズィト下で常備歩兵軍団＝イェニチェリを構成していたのは主にセルビア人である。彼らはアンカラの戦いでティムール軍と勇敢に戦い、殲滅した）。

その後、兄弟殺しがオスマン家の伝統行事になる。歴史家たちは、この「伝統行事」を「専制君主国家を維持するためであった」と論じている。歴史家たちは「国教」を甘く見ている。国教は中世帝国の統治機構であり、国教＝イスラーム教の長＝カイロ・アッバース朝カリフがバヤズィトの兄弟殺しを容認したことが、その後の兄弟殺しを肯定し続けた。

筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、オスマン家の兄弟殺しはオスマン帝国が「広義の中世」の成熟期の産物であることを意味する。

５．１１　デリー・スルターン朝

インドでは、グプタ朝期にバラモン僧が各地に赴任し、ヒンドゥー教を広めた。その後６４７年にヴァルダナ朝を開いたハルシャ・ヴァルダナが死去し、歴史家たちが「ラージプート時代」と呼ぶ群雄割拠の時代に突入する。本書では、ラージプート時代のインド史を割愛し、１２世紀後半～１４世紀後半のインドを論じる（コラム７３）。

前章の１節で、サーマーン朝の将軍アルプテギーンがアフガニスタンのガズニー市でガズナ朝を開き、サブク・ティギーンの代にパンジャーブ地方に侵攻してペシャーワルを占領したと述べた。その後ガズナ朝はラホールを占領する。だが、１０４０年のダンダーナカーンの戦いでセルジューク朝に大敗し、勢力を大きく縮小する。そして１１８６年、ガズナ朝下の地方勢力にすぎなかったゴール朝がギヤースッディーンの代にガズナ朝を滅ぼす。

ガズナ朝を滅ぼした後、ギヤースッディーンは拠点をヘラートに移してホラーサーン地方を支配する。他方、彼の弟シハーブッディーンがパンジャーブ地方に侵攻し、１１９２年のタラーインの戦いでラージプート諸侯の軍勢を破る。彼は軍団をベンガル地方（現在の西ベンガル州とバングラデシュ）にまで進め、北インド全域を支配した。

１２０３年、ギヤースッディーンが病死したため、シハーブッディーンはデリー市を陥落した奴隷軍団の長アイバクに北インドの統治を託し、中央アジアに赴く。だが１２０６年、シハーブッディーンは暗殺された。その後アイバクがスルターンを称し、デリーでマムルーク朝＝奴隷王朝を開く。歴史家たちは、奴隷王朝からはじまる5つのデリー王朝（奴隷王朝、ハルジー朝、トゥグルク朝、サイイド朝、ローディー朝）を「デリー・スルターン朝」と呼んでいる。

（日本では、エジプトのマムルーク朝と区別する目的でアイバクが開いたインドのマムルーク朝を「奴隷王朝」と呼ぶ場合が多い。慣例にしたがい、本書も「奴隷王朝」と呼ぶ。ちなみに、シハーブッディーンの死後、ゴール朝は急速に衰退する。前章のコラム４５で述べたが、ホラズム・シャー朝スルターンに即位したアラーウッディーンが１２１５年にゴール朝を滅ぼす）

アイバクの死後、アイバクの娘婿イルトゥトゥミシュがスルターンに即位する。彼は反発する貴族を平定し、ヒンドゥー教徒の反乱も鎮圧した。そして版図をパンジャーブ地方とラージャスターン州にまで広げる。

１２２２年、インダス河畔の戦いでモンゴ軍に惨敗したジャラールッディーンがインドに亡命を打診したが、イルトゥトゥミシュは丁重に断り、シンド州（現在のパキスタン・イスラーム共和国南部の州。州都はカラチ）ムルターンへの移動を勧める。ムルターンに移動したジャラールッディーンは、その後イラン高原に赴き、エスファハーンで再起するが、他方、イルトゥトゥミシュがシンド州を支配する。シンド州を支配した後、イルトゥトゥミシュは東征してガンジス川中流域のビハール州と下流域のベンガル地方も支配する。イルトゥトゥミシュは、シンド州とベンガル地方を含む北インド全域を再支配した。イルトゥトゥミシュの死後、彼の娘ラズィーヤが兄を殺害してスルターンに即位する。ラズィーヤは聡明な女性で、奴隷王朝の統治に尽力したが、女性のスルターンを認めない貴族や兵士たちが反乱を起こし、１２４０年に死去する。その後スルターンが傀儡（ノムナ）化した。

１２６６年、バルバンがスルターンの座を簒奪する。バルバンは反発する貴族やヒンドゥー教徒を殺戮し、密告を奨励して恐怖政治を実施する。他方、チャガタイ・ハン国やイル・ハン国の北インド侵攻を阻止した。だが、１２８５年に後継者の長男ムハンマンドがアルグン（アバカの長男）率いるイル・ハン国の軍勢と戦い戦死したため、バルバンは失意に陥る。そして１２８７年、イル・ハン国の軍勢がラホールを占領し、バルバンは死去する。

バルバンの恐怖政治下で、トルコ系イスラーム教徒と非トルコ系イスラーム教徒の格差が拡大した。バルバンの死後、非トルコ系イスラーム教徒のジャラールッディーン・ハルジーがスルターンの座を簒奪する。デリー・スルターン朝が奴隷王朝からハルジー朝に変遷した。

ジャラールッディーン・ハルジーは、トルコ系イスラーム教徒と非トルコ系イスラーム教徒の融和、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の共存等を推進し、温厚な統治を実施する。だが、彼の甥アラーウッディーン・ハルジーがデカン高原に侵攻し、ヤーダヴァ朝を支配した後、ジャラールッディーンを殺害する。そしてスルターンに即位した。その後チャガタイ・ハン国の大軍が北インドに侵攻する場面があったが、撃退する。そして、インド北西部のグジャラート州を支配し、デカン高原をほぼ制圧する（コラム７４）。

アラーウッディーンは、ヒンドゥー教から改宗した有力者に重職を与え、常備軍を編成する。また、検地を行い、地方有力者の徴税を禁止した。その後中央政府が地方の徴税も行うようになる。後のムガル帝国もこの徴税体制を継続するが、ハルジー朝期の徴税はかなりの重税であったらしい。

１３１６年、アラーウッディーンが死去し、１３２０年、ギヤースッディーン・トゥグルクがトゥグルク朝を開く。その後彼の息子ムハンマド・トゥグルクが南インドに侵攻し、カーカティーヤ朝を滅ぼしてホイサラ朝とパーンディヤ朝と屈服する。他方、ギヤースッディーンはベンガル地方を制圧したが、１３２５年に事故死する。

ギヤースッディーンの死後、ムハンマドが後を継ぐ。1327年、チャガタイ・ハン国の軍勢がデリー付近まで侵攻したが、ムハンマド率いるトゥグルク軍が撃退する。その後ムハンマドはアフガニスタンにまで勢力を拡大するが、二度のヒマラヤ遠征（カシミール地方への遠征）に失敗し、遷都や貨幣改革、農地改革等内政でも失敗する。1336年、南インドでヴィジャヤナガル王国が独立し、1347年、バフマンがデカン高原でバフマニー朝を開国する。

1351年、ムハンマドが死去し、従兄弟のフィールーズが後を継ぐ。フィールーズは内政を重視し、30年以上の在位期間中に行政改革や灌漑事業等を行い、トゥグルク朝を再興したが、彼の死後、内紛が多発し、歴代トゥグルク朝スルターンが短命になる。そして1398年、ティムール率いる軍勢がインダス川を越えて北インドに侵攻し、デリーを略奪して破壊する（コラム75、コラム76）。

ティムール率いる軍勢が去った後、1401年にディラーワル・ハーンがマールワー王国を開国し、1407年にムザッファル・シャー1世がグジャラート・スルターン朝を開国する。そして1412年、トゥグルク朝が滅ぶ。トゥグルク朝後のサイイド朝とローディー朝はどちらも短命王朝で、特筆すべき点はない。1526年、第一次パーニーパットの戦いでローディー朝軍を破ったバーブルがデリーに入城してムガル帝国を開国する（コラム77）。

コラム73： パッタダカル寺院群とアイホーレ寺院群、エローラ石窟群とアジャンター石窟群

3章のコラム30で述べたが、ラージプート時代のインドは、10世紀末頃までパーラ朝とプラティーハーラ朝、ラーシュトラクータ朝が鼎立していた。鼎立が瓦解した後、12世紀末～13世紀初頭頃まで群雄が割拠する。

本書では、ラージプート時代のインドに言及しないが、ラージプート時代に建立されたカルナータカ州のパッタダカル寺院群とアイホーレ寺院群、マハーラーシュトラ州アウランガーバード郊外のエローラ石窟群とアジャンター石窟群を軽視できない。すべて世界文化遺産になっているが、パッタダカル寺院群とアイホーレ寺院群、エローラ石窟群もアジャンター石窟群も建立後1000年以上経過している。破損が少なく、しかも砂石や玄武岩で建立した他の寺院も1000年以上残っている（花崗岩は硬いが、砂石や玄武岩は脆い）。

3章のコラム22で、アヤソフィア大聖堂について述べたが、アヤソフィア大聖堂以外にも建立後1000年以上経過した石造物や石窟が世界各地に存在する。コンクリートの耐用年数は100年しかないが、石材を使用すれば事故を起こした東電福島第一原発の石棺化＝1000年保管が可能になる。老朽原発も石棺化し、使用済み核燃料は石窟で1000年以上保管すべきである。

コラム74： パドマーワト（女神の誕生）

アラーウッディーン率いるハルジー軍がグジャラート州に侵攻する場面で、ラージャスターン州メーワール王国の王ラタン・シングが支配地域内の通過を拒否した。アラーウッディーンはラタン・シングの居城（チットールガル城）を半年以上包囲する。ラタン・シングは降伏したが、ラクシュマン・シングが籠城して抵抗し続けたため、多数の兵士が戦死した。チットールガル城は陥落し、城内で集団尊厳死（ジョウハル）が行われた。

インド映画「パドマーワト（女神の誕生）」は、チットールガル城の攻防を題材にしている。ラタン・シングがアラーウッディーンとの決闘で破れ、ラタン・シングの妃パドミニー（スリランカ王国の王女であったらしい）が焼死（サティー）したことになっているが、すべてフィクションである。筆者は、映像の対称性、歌と踊りが豊富なこのインド映画を堪能したが、最後の集団尊厳死のシーンに驚いた。

ちなみに、メーワール王国は再興し、後のムガル帝国と争いを繰り返し、インドがイギリスの植民地支配から独立するまで残る。

コラム75： ヴィジャヤナガル王国とバフマニー朝

ヴィジャヤナガル王国は王朝の変遷を繰り返し、1649年まで続く。バフマニー朝は分裂し、その後5つのイスラーム朝王国（アフマドナガル王国、ベラール王国、ビジャープル王国、ゴールコンダ王国、ビーダル王国）＝デカン・スルターン朝が1687年までデカン高原を支配する。

コラム76： ティムール帝国

1340年頃、チャガタイ・ハン国が分裂するが、1370年にティムールが再興し、トランスオクシアナ地方を制圧する。歴史家たちは、再興したチャガタイ・ハン国を「ティムール帝国」と呼んでいる。その後約30年に及ぶティムールの征服戦争は割愛する。ティムールの死後、ティムール帝国はシャー・ルフ（在位1409～1447年）とウルグ・ベグ（在位1447～1449年）の代に最盛期を迎えるが、ウルグ・ベグの死後、内紛が勃発し、政権がサマルカンド政権とヘラート政権に分裂する。1459年、アブー・サイードがサマルカンド政権とヘラート政権を統一するが、彼の死後、再度分裂する。そして1500年、ウズベク・ハン国（シャイバーニー朝）のムハマンド・シャイバーニー率いる軍勢がシル川を超えて侵入し、ティムール帝国を滅ぼす。このとき、インドに逃れたバーブルがムガル帝国を開国する。

ところで、歴史家の川口琢司氏は、著書「ティムール帝国（講談社）」で、ティムール帝国の帝都サマルカンドの人口は30万以上であったと論じている。川口氏の推定は正しい。サライの人口は60万以上との説もあるので、サマルカンドの人口は少なく見積もっても30万以上であったと思う。

サマルカンドは当時の巨大都市であった。サマルカンドは文化水準が高く、治安や衛生状態もよかった。世界各地から様々な物産がサマルカンドに集まり、周囲で農耕が行われ、照明や暖房で石油が使われていた。他方、銀貨を鋳造し、版図内で鉱物資源も採掘した。

とはいえ、製造業が不明である。アッバース朝イスラーム帝国が最初に製紙工場を建設した場所はサマルカンドである。また、「広義の中世」の突破期の中央アジア（西遼や西ウイグル王国が存在した頃の中央アジア）は製造業が主力産業であった。だが、ティムールは、各地から職人を集めたようだが、サマルカンドで毛織物や綿織物の製造が行われたという記録がない。すなわち、石油を精製して照明や暖房で使用するくらいに科学が発達していながら、製造業が発展していない。

私見であるが、中央アジアの製造業の衰退がシルクロードの衰退につながり、ユーラシア大陸東西の力関係の逆転にもつながったように思う。とはいえ、それが露呈するのは「広義の近代」の突破期である。

コラム77： マールワー王国（マールワー・スルターン朝）とグジャラート・スルターン朝

1401年、ディラーワル・ハーンがマディヤ・プラデーシュ州（ヒンドゥスターン平野とデカン高原の中間に位置する州）でマールワー王国を開国し、彼の息子フーシャング・シャー（在位1405～1435年）の代に発展する。フーシャング・シャーの宗教政策は寛容で、イスラーム王朝であったが、ヒンドゥー教寺院の建立を認めジャイナ教を保護した。フーシャング・シャーの死後、宰相マフムード・ハーン（在位1436～1469年）が王位を簒奪して王家が変遷する。マフムード・ハーンは厳格なイスラーム教徒で、ヒンドゥー教寺院を破壊し、メーワール王国と戦っている。彼はサイイド朝やグジャラート・スルターン朝とも戦った。マフムード・ハーンの死後、マールワー王国は衰退する。

グジャラート・スルターン朝は、1407年にムザッファル・シャー1世がインド北西部グジャラート州で開国したイスラーム王朝で、彼の孫アフマド・シャー1世（在位1411～1443年）の代に発展する。アフマド・シャー1世は厳格なイスラーム教徒で、ヒンドゥー教徒に人頭税＝ジズヤを課税し、ヒンドゥー教寺院を破壊した（他方、彼がヒンドゥー教徒を大臣に登用する場面もあった）。グジャラート・スルターン朝は、ムハマド・シャー1世（在位1458～1511年）の代に最盛期を迎えるが、その頃からポルトガルのインド支配が拡大しはじめる。1509年、グジャラート・スルターン朝はオスマン帝国から艦隊を得てのディーウ島沖でポルトガル海軍と戦ったが、惨敗した。

1526年、マールワー王国やメーワール王国の支援を得たバハードゥル・シャーがグジャラート・スルターン朝10代スルターンに即位する。即位後、バハードゥル・シャーは自身を支援してくれたマールワー王国に侵攻する。1531年、マールワー王国が滅亡した。その後バハードゥル・シャーは矛先をメーワール王国に向け、メーワール王国の首都チットールガルを包囲するが、フマーユーン率いるムガル帝国の軍勢に惨敗する。バハードゥル・シャーはローディー朝の残党を取り込み、ムガル帝国の軍勢を撤退させるが、1537年、ポルトガルとの会見の場で暗殺された。

翌1538年、バハードゥル・シャーが要請したオスマン帝国の大艦隊が到着するが、ポルトガルの拠点ディーウ島を攻略することはできなかった。1573年、ムガル帝国の軍勢が首都アフマダーバードを陥落し、グジャラート・スルターン朝が滅亡する。